契丹小字で表記された漢字音から見た契丹語音韻体系の研究

2007 年度　修士論文

京都大学大学院文学研究科　言語学専修
武内 康則

謝辞

本研究を進めるにあたり、ご指導をいただいた田窪行則先生、吉田和彦先生、吉田豊先生、白井聡子先生に感謝いたします。特に、吉田豊先生には、終始懇切なるご指導とご鞭撻を賜り、本論文をまとめるに際して親身なご助言と力強い励ましをいただきました。心より感謝を申し上げます。

また、研究過程において数々のご指導を賜りました、京都産業大学の庄垣内正弘先生、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の荒川慎太郎先生に心より感謝を申し上げます。

最後に、京都大学言語学研究室の皆様の励ましとご協力があって、この論文を完成することができました。この場を借りてお礼申し上げます。

2008 年 1 月

武内 康則

目次

1 はじめに 1

1.1 契丹文字 1

1.2 本論文の目的と構成 1

2 導入 2

2.1 契丹文字と契丹語 2

2.1.1 契丹文字の研究史 2

2.1.2 原字の性質 3

2.1.3 契丹語 4

2.2 漢語の音節構造 5

2.3 契丹小字で記された漢字音 6

2.4 先行研究 8

2.4.1 聶(1988) 9

2.4.2 于(1998) 10

2.4.3 愛新覚羅(2004) 10

2.4.4 孫(2007) 11

2.4.5 まとめ 12

2.5 対象とする資料 12

2.6 分析の限界 14

3 声母 15

3.1 総論 15

3.2 各論 16

3.2.1 唇音 17

3.2.2 歯茎音 21

3.2.3 後部歯茎音 26

3.2.4 軟口蓋音 31

3.2.5 声門音 36

3.2.6 半母音 37
3.3 小結 39
4 韻母 42
4.1 総論 42
4.2 各論 46
4.2.1 -m 韻尾 47
4.2.2 -n 韻尾 49
4.2.3 -ŋ 韻尾 52
4.2.4 非鼻音(-Ø、-u、-i、-ɛ)韻尾 57
4.2.5 入声韻尾 64
4.3 小結 67
5 まとめ 70
5.1 契丹語の音韻体系 70
5.1.1 漢字音の表記には表れない音素 70
5.1.2 契丹語の音韻体系 71
5.2 原字の推定音価 72
5.3 契丹語の母音調和 74
5.3.1 先行研究 74
5.3.2 分析 75
5.4 契丹小字で表記された漢字音の性質 80
5.5 おわりに 81
参考文献 82
付録 契丹小字原字総表 ..... エラー! ブックマークが定義されていません。

1　はじめに

1.1　契丹文字

契丹文字は中国東北部に建国された遼(916-1125)の国字である。遼の時代に定められた文字は「契丹大字」と「契丹小字」の 2 種類がある。契丹文字は遼の滅亡後、金(1115-1234)でも使用され、三百年近く使用されることとなった。その後使用者は絶え、現在は未解読文字となっている。契丹文字の研究は近年大きく進展したものの、全面的な解明には至っていない。

1.2　本論文の目的と構成

本論文の目的には、契丹原字の推定音価の検証と契丹語の音韻体系の解明の 2 つがある。

1970-80 年代に行われた漢字音を表記した契丹小字の研究によって、多くの契丹原字の音価が推定された。近年、多くの契丹文墓誌が出土し、はじめに原字の音価が推定された当時と比べると契丹小字の資料は格段に豊富になった。本論文では、新しく出土した契丹小字資料や、これまでに使われてこなかったパスパ文字による漢語の音韻資料を用い、契丹小字で表記された漢字音を声母と韻母によって体系的に再整理することによって、先行研究の推定音を検証する。また、契丹小字で記された漢字音は、契丹語の音韻体系を反映していると考えられので、漢字音と契丹小字との対応を分析することで､契丹語の音韻体系の解明を試みる。さらに、表音文字で記された漢字音の分析により漢字音の歴史変化に対しても考察を加えたい。

2 章では、先行研究や研究方法などの研究を進める上で問題となることがらをまとめる。3 章では、契丹小字で表記された漢字音の声母体系を分析する。4 章では、契丹小字で表記された漢字音の韻母体系を分析する。5 章では、3 章や 4 章の分析から、契丹語の音韻体系および原字の推定音価についてまとめる。さらに、契丹語の「母音調和」に対して考察を加える。

2　導入

この章では、先行研究や研究上の問題点などをまとめ、本題への準備とする。

2.1　契丹文字と契丹語

2.1.1 契丹文字の研究史

1930 年代に契丹文字が記された哀冊が発見されたことによって、契丹文字の研究は始まった。1930 年代の契丹文字の研究としては、羅福成、王静如、厲鼎煃らによるものがある[1]。主に漢文哀冊と契丹文哀冊を比較することにより、数詞、十干、日付などの解読に成功した。1950 年代は、日本での研究が活発となり、村山七郎による突厥文字と関連させた解読の試み[2]や、長田夏樹による統計を用いた分析[3]など、さまざまな研究が行われた。しかし、憶測に基づく研究が多く、実質的な進展はなかったといえる。1970 年代になり、中国社会科学院民族研究所と内蒙古大学蒙古学研究室から構成される契丹文字研究小組の研究により、契丹小字の解読は大きく進展した。彼らの研究は多岐にわたる：

1. 契丹小字を構成する「原字」の整理
2. 漢字音との対応による原字の音価の推定
3. 漢文資料に残された契丹語の語彙の研究
4. 契丹語の名詞・動詞語尾の研究

---

[1] 羅福成(1933)「遼宣懿皇后哀冊釈文」『満洲学報』第 2 号。王静如(1933)「遼道宗及宣懿皇后契丹国字哀冊初釈」『歴史語言研究所集刊』第 3 本第 4 分:467-478(陳・包編 2005:58-73 に収録)。厲鼎煃(1934)『契丹国書略説』仁声印刷所(陳・包編 2005:30-57 に収録)などの研究がある。

[2] 村山七郎(1951)「契丹文字解読の方法」『言語研究』第 17,18 号:47-70。

[3] 長田夏樹(1951)「契丹文字解読の可能性―村山七郎氏論文を読みて」『神戸外大論叢』第 2 巻 4 号:40-66 (長田 2001:128-153 に収録)。

特に 2.の漢字音との対応による原字の音価の推定は、それまでの憶測に基づく研究とは異なり、多くの漢字音との対応から反復して推定音価が検証されることとなったために、信頼できる成果が得られたといえる。最終的には 130 文字以上の原字の音価の推定に成功している。彼らの研究成果は清格爾泰ほか(1985)にまとめられ、その後の研究により修正される部分はあったものの、現在も小字研究の基礎となっている。

その後、契丹文字の研究は活発になり、さまざまな成果が得られてきた。現在 440 文字ほどあると考えられている原字のうち、およそ半数に推定音価が与えられ、多くの語の字形が判明している。

2.1.2 原字の性質

近年の研究により契丹小字は表音文字が主体であると考えられている。契丹小字は「原字」と呼ばれる構成要素を組み合わせることで表記されている。契丹小字が使われていた当時の原字表などは残っていないため、原字の総数ははっきりしないが、清格爾泰ほか(1985)では契丹原字を 378 個認めている。また、吉如何(2007)では、後に発見された原字も加え 438 個の原字を認めている。契丹原字は表音文字と考えると非常に文字の数が多いが、それは次のような理由によると考えられる：

- 単音を表す文字だけではなく音節を表す原字が含まれる
- 数詞や方角を表す原字など、表意文字が含まれる
- 漢字音の表記専用と考えられる原字がある
-  、 などの系統的な使い分けがされていない「異字」が含まれている

異字に関しては現在までに包括的に研究がされたことがないが、清格爾泰(2002:30-105)は、以下の原字の組が同じ文字の異なった書き方である可能性を指摘している：

 —　 —　 —　 —

 — —　 —　 —　 —

 —　 —　 —

これらの文字には、𗼇—𗽁、𗾞—𗿋、𘉋—𘊠、𘌽—𘍊、𘏁—𘐆、𘒣—𘓐など、漢字音の表記の際に用いられるものもある。「侍」𘝞𘓐~𘝞𘓜など、同じ漢字音がどちらの原字でも表記されうることや、字形が非常によく似ていることから、清格爾泰(2002:30-105)の指摘は妥当であると考える。したがって、本論文では、転写の際には資料どおりに区別して記すが、音価の推定や音韻体系の分析の際にはこれらを同一の文字として扱う。

2.1.3 契丹語

契丹大字資料・契丹小字資料には、契丹人が話した契丹語が書き表されていると考えられている。現在判明している契丹語の固有語は限られており、言語の系統について十分に論じることはできないが、アルタイ諸語である点では研究者の同意が得られている。また、以前から歴史の研究者や契丹文字の研究者から契丹語がモンゴル諸語であるという意見が出されており、以下に示す四季の名称などがモンゴル諸語と近似していることが指摘されている：

	春	夏	秋	冬
契丹小字 推定音価[4]	𘍞𘓐 ɣou-uɑn,ur	𘐷𘓐 ʔ-un	𘍍𘐷𘓐 n-ɑm-uɑn,ur	𘓄𘓵 u-ul
モンゴル語[5]	xɑbɑr	dʒun	nɑmər	ɵbɵl
ダグール語	xɑur	nɑdʒir	nɑmɑr	ugul
シラ・ユグル語	χɑwər	dʒun	nɑ:mər	wəl
モングォル語	xɑwur	jar	nɑmur	rgul
ドゥンシャン語	tʂuntɕiɑn	qɑlun tʂɑ	tɕiutɕɑn	untʂɑ~un
バオアン語	ɕitgə	ɢɛr	doŋkə	ŋguŋ

[4] 本論文で用いる契丹原字の推定音価は清格爾泰(2002)による。なお、原字に複数の推定音価が与えられている場合は、コンマによって並べている。また、ハイフンは原字の境界を示している。

[5] モンゴル諸語の形式は孫主編(1990)による。

その一方で、親族名称などはモンゴル諸語とは異なっていることも知られている：

	父	母	兄	祖父	子
契丹小字 推定音価	𘮬 ɑi	𘮭 muo	𘮮 iɑ,iæ	𘮯 𘮬 pu ɑi	𘮱 𘮰 p-xi,x
モンゴル語	ɑ:b~ɑ:dʒɛ:	əx	ɑx	əbəg ətʃəg	xʉ:
ダグール語	ɑtʃɑ:~ətʃəg	əg	ɑg~ɑkɑ:	uta:tʃi~jə:jə	kəku
シラ・ユグル語	ɑdʒɑ	hgə	ɑɢɑ~gogo	ɑ:wɑ	ky:ken
モングォル語	ɑ:bɑ	ɑ:mɑ	ɑɢɑ~ɑdʑɑ	ɑ:de:	ku:
ドゥンシャン語	ɑwi~ɑdɑ ~ɑbɑ	ɑnɑ~ɑnəi ~əkiə	gɑji~ɑɣɑ ~gɑgɑ	jəjə~dʑiədəi	kəwon
バオアン語	ɑbo	ɑmə	gɑgə	dɛdə	kuŋ

契丹文字研究の成果から契丹語では多音節語が主体であることがわかっている。また、契丹小字の表記からは、名詞や動詞に比較的多くの形態変化を見ることができ、名詞の性・数・格や、動詞のアスペクト・時制などによる変化を反映していると考えられている。

2.2　漢語の音節構造

漢語の音節は、一般的には IMVE/T として分析される。I(声母)は音節初頭の子音を表し、M(介音)は I と V との間に介在するわたり音の一種であり、V(韻腹)は主母音である。E(韻尾)は末音のことで音節末尾の副母音または子音である。T(声調)はトーンである。また、伝統的に漢語音韻学では音節初頭子音を声母(I)と呼び、声母以外の部分(MVE/T)を韻母と呼んでいる。

たとえば、「天」＜現代音 tʰiɛn˥＞では、tʰの部分が声母、iɛn˥の部分が韻母に相当する。また、IMVE/T にあてはめると、以下のようになる：

声母	韻母			
声母	介音	韻腹	韻尾	声調
I	M	V	E	T
t^h	i	ɛ	n	˥

介音の種類にはØ、i、u、iu がある。また、韻尾はØであることがある。

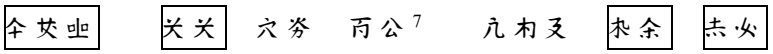
中古音では声調は平声、上声、去声、入声の 4 種類がある。これらのうち、平声、上声、去声は声の高さによるものである。また、入声は開放を伴わない-p, -t, -k で終わる音節に特有の声調である。

本論文では 601 年に編まれた韻書『切韻』に反映される漢字音を中古音と呼び、1324 年に編まれた韻書『中原音韻』に反映される漢字音を中世漢語音と呼ぶ。また、13 世紀に制定されたパスパ文字によって記された漢字音の体系をパスパ漢字音と呼ぶ[6]。

2.3 契丹小字で記された漢字音

近年の契丹小字の研究により、契丹文字資料には漢字音を表記したものが含まれていることがわかっている。たとえば、契丹小字資料の「宣懿皇后哀冊文」の冒頭部分は次のように刻されている：

[6] 中古音および中世漢語音の再構音は李・周編撰(1999)による。パスパ漢字音は Coblin(2007)による再構音を用いる。中世漢語音の体系とパスパ漢字音の体系は大きく異なっている部分がある。声母の表記ではパスパ文字では有声音声母の無声化は起こっておらず、有声/無声の区別がはっきりと表示される。これが基準とした言語の違いによるものなのか、archaism によるものであるのか、研究者の意見は分かれている。Coblin(2007:72-74)でこの問題がまとめられている。韻母に関しては、ともに中古音と比べると大幅に単純なものとなっており、共通する部分が多いといえるので、韻母を検討する際にパスパ漢字音を音価推定の資料として用いるが、大きな問題にはならないと考える。



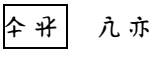
s-ue-en[8] i-i nou-e muo-n k-ən-ən tʃ-ɑi v-un

宣 懿 地 母 哀 冊 文

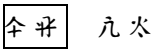
(皇后の意)

このうち実線で囲んだ部分が漢字音を表記した部分である[9]。たとえば、「宣」の漢字音は𗪘 s、𗥃 ue、𗦟 en の 3 つの表音文字を組み合わせることで記されている。

これらの漢字音を記した部分では、発音の異なる漢字であっても同じ原字を用いて記していることがある。例えば、「将軍」と「相公」は、契丹小字で次のように記される[10]：

将軍 <中世漢語音 tsiaŋ kiuən>  (蕭大山和永清公主墓誌 l. 1)

s-iaŋ k-iun

相公 <中世漢語音 siaŋ kuŋ>  (耶律迪烈墓誌 l. 1)

s-iaŋ k-uŋ

「将」と「相」は、声母が異なっているが、契丹小字では同じ文字𗪘によって声母が記されている。これは契丹小字で表記された漢字音は、契丹語の音韻体系に適応したものであったためと考えられる。さらに、契丹小字資料には多くの漢語が混入していることがわかっていることから、契丹語の音韻体系に適応した漢字音の体系が存在していた可能性がある。

---

[7] 𗤓 n は属格語尾と考えられる。

[8] 便宜のため原字の推定音価を与えた。

[9] 「宣懿皇后哀冊文」は漢文で書かれた哀冊も同時に出土しており、漢文哀冊との対応から、引用した部分はすでに解読されている。

[10] 実際には、ここで示した字形以外にも「将」「相」の音を表すものがあり、一部の契丹小字では s-と ts-を区別して表記されていることもある。しかし、ここでは説明の便宜から、この例のみを挙げている。

また、契丹小字で記された漢字音では、系統的に声調を区別して表記したと思われる例はなく、

宜 (平声) ＜中世漢語音 i＞　　𗼇𗵒　ŋ-i　　(耶律仁先墓誌 l. 14)
義 (去声) ＜中世漢語音 i＞　　𗼇𗵒　ŋ-i　　(皇太叔祖哀冊文 l. 1)

京 (平声) ＜中世漢語音 kiəŋ＞　𘈩𗾔　k-iŋ　　(耶律仁先墓誌 l. 14)
景 (上声) ＜中世漢語音 kiəŋ＞　𘈩𗾔　k-iŋ　　(皇太叔祖哀冊文 l. 9)

など、声調が異なっていても同じ文字を使って記した例があることから、平声、上声、去声の声調の違いは書き表されていないと言える。したがって、3 章、4 章で漢字音と契丹小字の対応を分析する際には声調の違いは捨象する。

漢字音の表記に使用される原字のなかには、契丹語の固有語での用例が確認できていないものがある。契丹小字は十分に解読されているわけではないので、文字の分布を詳細に調査することは不可能であるが、それらは漢字音の表記専用の原字であるとする意見がある。陳(1987)は、文字組織のなかには本来その言語に存在しない音を表す符号があることを否定することはできないと言い、実際に表記される際に混同される可能性はあるが、蒙古文字に外国語音を記す文字(ガリック文字)があるように、契丹小字にも外国語音の専用の文字がある可能性を指摘している。

2.4　先行研究

契丹原字の推定音価を示した近年の研究としては、清格爾泰(2002)、愛新覚羅(2004)、劉(2005)、吉如何(2007)がある。清格爾泰(2002)は、清格爾泰ほか(1985)以降に新たに解読された原字やこれまでの研究の問題点を総括し、音価推定の根拠と原字の推定音価を示している。愛新覚羅(2004)は、契丹小字で表記された漢字音を中古音を基準にして分析し、さらに契丹語の母音調和からの分析や、関連する諸言語との比較によって、原字の音価を推定している。劉(2005)、吉如何(2007)も、原字の推定音価を示すが、音価推定の根拠は示していない。

2.4.1 以降では、契丹語の音韻体系・音声の弁別に対する先行研究での言及とその問題点をまとめる。清格爾泰(2002:30)は、現在の契丹小字の研究段階では原字

の音価の表記を系統化することはできないと言っており、清格爾泰(2002)は原字の音価を推定する際には、必ずしも契丹語の音韻体系を考慮しているわけではないようである。契丹語の音韻体系、音声の弁別に関する先行研究としては、聶(1988)、于(1998)、愛新覚羅(2004)、孫(2007)がある。

2.4.1 聶(1988)

聶(1988)では、契丹小字で記された漢字音や、契丹語の語彙を漢字音写によって記した『遼史』「国語解」に使用される漢字の分析をもとにして、契丹語と漢語の訳音の対応について論じている。以下に要点をまとめる：

- 音訳漢字として心母(*s-)の漢字は使われるが、精母(*ts-)、清母(*ts^{h}-)、従母(*dz-)の漢字は 1 つも使われないので、契丹語にはもともと ts-と ts^{h}-がなく、s-があるのみである。
- 契丹語の唇舌牙類の閉鎖音は*p-、*t-、*k-があるのみである。
- 舌上音[11]の音訳漢字は使われないので、契丹語には漢語のʈ-、ʈ^{h}-に相当する音がない。
- 軽唇音声母の音訳漢字は使われないので、契丹語には f-はない。

さらに、契丹小字の漢語の対訳に用いられる声母および韻母として、以下のものを挙げている：

p, m, v, s, t, n, l, tʃ, ʃ, ʒ, k, x, ŋ, q, 〇(ゼロ声母)
a, e, ue, o, io, ɔ, i, ui, ai, am, em, an, en, in, un, iun, aŋ, iaŋ, uaŋ, iŋ, oŋ

問題点としては、聶(1988)では漢語文献の音写に使用される漢字の分析を重視しており、契丹小字による表記は重視していないと思われる点である。唇音に関して言うと、聶(1988)は唇音としては p だけを認めており、漢字音の f-は契丹小字では p で表記されたと言う。しかしながら、3.2.1 で示すように、契丹小字では漢字音の f-と p-を区別して表記しており、実際の契丹小字での表記とは合致しない結論となっている。

[11] 知母(*ʈ-)、徹母(*ʈ^{h}-)、澄母(*ɖ-)、娘母(*ɳ-)に相当。

2.4.2 于(1998)

于(1998:259-359)では、漢語文献に保存されている契丹語を網羅的に収集している。そして、同一の語の音写に用いられる漢字の通用などを分析し、次のような指摘をする(于 1998:347)：

- 契丹語には有気音がない(あるいは清濁音が区別されていない)。
- 契丹語には[tɕ]や[tɕʰ]などの舌面音がない。
- 契丹語にはそり舌音がない。
- 契丹語では[n]と[l]を区別しない。

問題点としては、漢字音の歴史変化を十分に考慮しておらず現代の漢字音によって分析していることである。たとえば、「詳」＜現代音 ɕiaŋ＞と「桑」＜saŋ＞、「習」＜ɕi＞と「思」＜sɿ＞が通用することから、契丹語では[ɕ]と[s]が区別されていなかったという。しかし、中世漢語音では「詳」＜siaŋ＞、「桑」＜saŋ＞、「習」＜si＞、「思」＜sï＞のように、どの漢字音も初頭子音は s-であり、当時はまだ s-を保っていたと考えるのが妥当である。このように研究方法に問題があるため、これらの結論が妥当なものであるとは言えない。

2.4.3 愛新覚羅(2004)

愛新覚羅(2004)は、契丹小字で表記された漢字音を中古音を基準にして分析し、さらに、契丹語の母音調和や関連する諸言語との比較によって、原字の音価推定や音韻体系の分析を行っている。そして、研究を帰納した結果として以下の体系を示している：

閉鎖音：	b / p / d / t / g / k / q
破擦音：	dʒ / tʃ
摩擦音：	s / ʃ / ʒ / v / x
鼻音：	m / n / ɳ / ŋ
流音：	l / r
半母音：	j

単母音　　a / o / ə / u / i / æ
二重母音　　au / ia / ai / io / oi / əu / iu / ui / iæ

愛新覚羅(2004)では、根拠とするデータがどの資料によるものであるのかなどが十分に示されておらず、検証することが困難である部分がある。また、母音調和の性質を根拠に原字の音価を推定することがあるが、参考文献や先行研究に配慮がなく、どのような性質の母音調和を想定しているのか不明である。関連する諸言語との比較においても、どのような根拠によって契丹語の同族語を決定しているのか示されていないなど問題がある。

2.4.4 孫(2007)

孫(2007)は、契丹小字では表記されるが、契丹語には本来なかったと考えられる子音を見分けることを目的としている。宋元時代の史籍に漢字音写によって保存された契丹語を分析した結果、契丹語の子音には、*p、*b、*m、*s、*t、*d、*n、*l、*r、*č、*ǰ、*š、*k、*g、*h、*q、*γ、*y、*w があると言う。そして、本来契丹語には語頭の*f-、*ts-、*ʐ-、*ŋ-がなく、それらの音に対応している𘓱 、𘓵 、𘔼 、𘔽 は漢語専用の文字であるという。

孫(2007)は、契丹語の音韻体系の解明を目的としたものではい。また、漢文資料の分析による子音体系を示しているが、その根拠は全く示されておらず、附した脚注で聶(1988)を挙げているのみである。さらに、孫(2007)で示された子音体系と聶(1988)で示された体系(2.4.1 を参照)は異なっている。

2.4.5 まとめ

先行研究では、契丹文字資料や漢文資料によって、契丹の音声について分析している。しかし、愛新覚羅(2004)や孫(2007)は、有声/無声(有気/無気)[12]の違いによる閉鎖音に対立を認めているのに対して、聶(1988)や于(1998)は認めていないなど、先行研究の結論は大きく異なっている。また、先行研究の一部には研究方法に問題があるものがあり、再検討が必要であると考えられる。

2.5 対象とする資料

契丹語の言語資料には、契丹文字で記されたものの他に、『遼史』「国語解」や『遼金元三史國語解』などの漢文資料に漢字音写の形で残されたものがあり、先行研究にはこれらを対象としたものがある。しかし、「国語解」には、「鷹軍」などの漢語由来のものが含まれ、さらに漢語以外の語においても多くが官職名や地名であり、契丹語の基礎語彙といえるものは少ない[13]。また、『遼金元三史國語解』は比較的多くの語を集録しているが、それらを満州語やモンゴル語で解いており、牽強付会な説が多く信頼できるものとはいえない[14]。漢文資料には以上のような理由があるため、本論文では契丹文字資料のみを対象とする。

契丹文字には契丹大字と契丹小字があるが、契丹大字の研究は契丹小字ほど進んでいない。さらに、契丹大字と契丹小字がどのように使い分けられたのかはっきりしておらず、同一の言語・方言が記されているのかどうかについても研究者の意見は一致していない。したがって、本論文ではより研究が進んでおり比較的信頼性が高いと考えられる契丹小字資料を用いる。先行研究を参考に漢字音を表

---

[12] 愛新覚羅(2004)では、2.4.3 で示したように閉鎖音の対立を p/b、t/d、k/g のように記している。これらがどのような対立であるのかは明確には示されていない。

[13] 清格爾泰ほか(1985:2)によると「国語解」に収められた 200 ほどの項目のうち、契丹語の固有語であるといえるものは 40 ほどであるという。

[14] 白鳥(1913:854)は、『遼史』「国語解」では契丹語の「腹心」を意味する語を「算」と漢字音写するが、『遼金元三史國語解』では「算」を「蘇斡延(suwayan)」と書き換え、満州語の「黄色」であると説いた例などを挙げ、「斯くの如く原書に意味を明示せる契丹語に於いてすら、恣に之を変更して顧ざる程なれば、その余の名称に就いて、同書の与えたる説明の信ずるに足らざるは勿論なり」と、『遼金元三史國語解』の問題点を指摘している。

記したものを収集した。対象としたのは以下の資料である。刻された年代順に挙げる：

(1) 耶律宗教墓誌　重熙二十二年(1053 年)
(2) 興宗皇帝哀冊　清寧元年(1055 年)
(3) 耶律仁先墓誌　咸雍八年(1072 年)
(4) 仁懿皇后哀冊　大康二年(1076 年)
(5) 耶律迪烈墓誌銘　大安八年(1092 年)
(6) 蕭大山和永清公主墓誌　寿昌元年(1095 年)
(7) 耶律奴墓誌銘　寿昌五年(1099 年)
(8) 耶律弘用墓誌　寿昌六年(1100 年)
(9) 道宗皇帝哀冊　乾統元年(1101 年)
(10) 宣懿皇后哀冊　乾統元年(1101 年)
(11) 澤州刺史墓誌　乾統八年(1108 年)
(12) 許王墓誌　乾統五年(1109 年)
(13) 皇太叔祖哀冊　乾統十年(1110 年)
(14) 宋魏国妃墓誌銘　乾統十年(1110 年)
(15) 故耶律氏銘石　天慶五年(1115 年)
(16) 大金皇弟都統経略郎君行記　天会十二年(1134 年)
(17) 蕭仲恭墓誌　天徳二年(1150 年)
(18) 金代博州防御使墓誌　大定十年(1170 年)

これらの資料の内容や先行研究は参考資料にまとめている。参考資料の 1 章では、資料の情報と先行研究を示し、次のように契丹小字で表記された漢語からの借用語をまとめている：

整理番号	行	契丹小字	対応する語
A1	1		廣陵郡王
A2	2		大王
A3	3		景宗皇帝
A4	3		秦晋国王

参考資料の 2 章では、収集した漢字音を現代音(ピンイン)によって並べ、出現個所を 1 章の整理番号によって示し、1 章のリストと相互に参照できるようになっている：

現代音(ピンイン)	漢字	＜中世漢語音/パスパ漢字音＞	字形	語尾	出現個所
GUANG3	廣	＜kuaŋ/kwaŋ＞	𠘨		A1
GUANG3	廣	＜kuaŋ/kwaŋ＞	𠘨		A21
GUI1	圭	＜kui/kyĕ＞	𠘨		P8
GUI4	貴	＜kui/kuĕ＞	𠘨		F18
GUO2	国	＜kui/kuĕ＞	𠘨		A4

2.6　分析の限界

漢字音との対応から契丹語の音韻体系を考える上では限界がある。

3 章で示すように漢語の有気閉鎖音と無気閉鎖音が契丹小字で書き分けられていると思われる例があるが、これが漢語と同じく有気/無気の対立であったのか、それとも有声/無声、fortis/lenis などの対立が、有気/無気の対立によって反映されたものであるのか知ることは困難である。さらに、漢語にはない音声の対立が契丹語にある場合には、漢字音との対応からそれらを知ることはできない。

また、漢語の表記専用と考えられる原字があるが、契丹小字は未だに十分に解読されていないので、漢字音あるいは契丹語にのみ使われるのか、どちらにも使われる可能性があるのかは厳密には知ることができない。

以上のような理由から、本論文では以下の方針で分析を行う：

- 基本的には漢字音との対応から観察可能な弁別に限る。
- 漢字音の対応からは知ることができない音素については、ほぼ同意が得られていると考えられるものを補充する。
- 漢字音表記専用と考えられる文字でのみ区別されている音は括弧をつけて記す。

3　声母

3.1　総論

契丹小字で表記された漢字音から契丹語の音韻体系を分析するためには、まず当時の漢語の発音を推定する必要がある。中古音と契丹小字で表記された漢字音とを比較すると、声母に関しては次の変化を観察することができる：

有声音声母の無声化

中世漢語音では中古音の有声音声母が、声調を条件として変化し、平声では無声有気音に、仄声(平声以外の声調、すなわち上声、去声、入声)では無声無気音に変化する(藤堂・相原 1985:242-243)。たとえば、中古音の群母(*g-)は、中世漢語音では、平声では k^h-に、仄声では k-に変化し、それぞれ溪母(*k^h-)、見母(*k-)と合流している。

契丹小字で表記された漢字音では、群母仄声「郡」𘈩𘠪 は、見母「軍」𘈩𘠪 と同じく𘈩 によって声母が記される一方で、群母平声「期」𘊴𘋢 は、溪母「卿」𘊴𘍿 と同じく𘊴 によって声母が記されるなど、有声音声母の無声化を反映していると思われる現象が観察できる。

他の調音点でも同様のことが言えるため、当時すでに有声音声母の無声化が起こっていたと考える。

舌上音の正歯音への合流

中古音の正歯音声母(tʂ-、$tʂ^h$-、dʐ-、ʂ-、ʐ-、tɕ-、$tɕ^h$-、dʑ-、ɕ-、ʑ-)と舌上音声母(ʈ-、$ʈ^h$-、ɖ-、ɳ-)は区別されているが、後の中世漢語音では舌上音は正歯音に合流する(藤堂・相原 1985:242-243)。

契丹小字で表記された漢字音では、舌上音声母の「朝」𘉐𘏨 (中古音 ʈɖiɛu ＞ 中世漢語音 tʂhiau)が、正歯音声母の「春」𘉐𘠪 (中古音 tɕhĭuĕn ＞ 中世漢語音 tʂhiuən)と同じ原字で表記されていることから、既に舌上音声母が正歯音に合流していたと考える。

以上の特徴から、当時の漢語の声母体系を以下のように推定する：

閉鎖音	p	t		k	ʔ
	p^h	t^h		k^h	
破擦音		ts	tʂ		
		ts^h	$tʂ^h$		
摩擦音	f	s	ʂ	x	
	v		ʐ		
鼻音	m	n		ŋ	
流音		l			

3 章では、原字を初頭子音によって分類し、単独では漢字音を表記することがない原字を中心に音価を推定する。また、音価の推定の際には 4 章で分析することなども考慮している場合がある。

3.2 各論

契丹小字によって表記された漢字音を、声母の調音点ごとに分けて検討する。はじめに対音例を示すが、声母の推定音によって大きくまとめ、相当する中古音声母も示している。表の項目は順に、表記された漢字、漢字音の推定音価[15]、対応する契丹小字、契丹小字の推定音価である。

なお、同一の漢字の対音例が複数ある場合は、使用される原字が異なる場合を除き 1 度だけ記載している。実際に出現している総数や用例に関しては参考資料を参照されたい。表で、漢字に附されている「?」は、契丹文字と漢字との対応に疑いがあることを意味し、契丹小字に附されている「?」は、漢字との対音に関しては問題ないが契丹小字の誤写が疑われることを示している。

[15] 表では、＜miən/min＞のように漢字音の推定音価を示している。順に、中世漢語音、パスパ漢字音である。

3.2.1 唇音

先行研究のまとめ

- 聶(1988)は、契丹語の p、m、v によって唇音の声母を表記したと言う。また、漢文資料には非母、敷母、奉母の音訳漢字は使われないので、契丹語には f- はないと言う。
- 愛新覚羅(2004)は、唇音の声母の表記に用いられる原字に p、b、m、v の音価を与えている。
- 孫(2007)は、契丹語の口語には f-がなく、𘈩 は漢語専用の文字であると言う。

契丹語での弁別

表 1

m-	明母		
	愍＜miən/min＞	𘓵 𘓐	m-in
	門＜muən/mun＞	𘓵 𘓓	m-ən
	睦＜mu/ʊu＞	𘓵	mu
	馬＜mua/ma＞	𘓵 𘓔	m-ɑ
	密＜mui/muĕ＞	𘓵 𘓕	m-rə
		𘓵 𘓗	m-i

m-は、ほぼ規則的に𘓵 で記される。𘓵 が他の声母の表記に用いられることはない。𘓵 は漢字音に限らず、「馬」𘓵 𘓘 m-ri など、契丹語の固有語の表記にもよく用いられており、契丹語にも m-に相当する音が独立して存在していたと考えられる。例外としては、「睦」𘓵 の例がある。漢字音の表記に𘓵 が用いられるのはこの一例である。「睦」はパスパ漢字音では ʊu である。パスパ漢字音が同じ「武」ʊu が、𘓵 と表記されることを考えると、𘓵 は𘓵 の異字であるかもしれない。

表 2

v-	微母		
	文＜vuən/ʊun＞	𘠪𘠫	v-un
	武＜vu/ʊu＞	𘠬	u
		𘠪𘠭	v-u

v-は基本的に𘠪で記される。𘠪が他の声母の表記に用いられることはない。𘠪は契丹語の固有語の表記に使われた例は見つかっていない。吉如何(2007)による統計では[16]、𘠪の使用例は 19 例あり、すべて合成字の第一原字として出現している。v-が契丹語の音素であるとすると、𘠪の出現数は非常に少なく出現する場所も偏っていることになる。したがって、契丹語には本来 v-はなく、𘠪は漢字音の表記専用の文字であると考えたい。v-の例外的な表記としては、「武」𘠬がある。𘠬は「楚」＜tʂhu/tʂ'u＞𘡎𘠬、「祖」＜tsu/tsu＞𘠭𘠬において韻母の表記に使用される文字であり、ɯ の音を表示していたと考えられる(4.2.4.3 参照)。この表記は、弱化によって、vu ＞ wu ＞ ɯ のような変化を経たことによると考える。

[16] 具体的にどの資料を対象としたのかは示されていない。

表 3

p-	幫母			竝母(仄声)		
	賓＜piən/pin＞	𐲍 𐲦？	ɑn-in	驃＜piau[17]/bɛw＞	𐲢 𐲣	p-iɑu
	本＜puən/pun＞	𐲢 𐲤	p-ən	部＜pu/bu＞	𐲥 𐲨	p^h,f-u
	兵＜piəŋ/piŋ＞	𐲢 𐲧	p-iŋ		𐲥 𐲩	p^h,f-u,ui
	伯＜pai/paj＞	𐲢 𐲪	p-ɑi		𐲢 𐲨	p-u
	博＜pɑu/paw＞	𐲢 𐲫	p-o,ɑk		𐲢 𐲩 𐲨	p-u,iu-u
	保＜pɑu/paw＞	𐲢 𐲨	p-u		𐲢 𐲩	p-u,ui
				僕＜phu/bu＞	𐲢 𐲬	p-u
p^h-	滂母			竝母(平声)		
	品＜phiən/p'im＞	𐲥 𐲭	p^h,f-m	平＜phiəŋ/biŋ＞	𐲥 𐲧	p^h,f-iŋ
f-	非母			敷母		
	方＜fuaŋ/faŋ＞	𐲥 𐲮	p^h,f-uɑŋ	鋒＜fuŋ/fuŋ＞	𐲥 𐲯	p^h,f-uŋ
	夫＜fu/fu＞	𐲦	fu,p^hu	訪＜fuaŋ/faŋ＞	𐲥 𐲮	p^h,f-uɑŋ
	府＜fu/fu＞	𐲦	fu,p^hu	副＜fu/fuw＞	𐲦	fu,p^hu
		𐲧	fu,p^hu		𐲧	fu,p^hu
	父＜fu/fu＞	𐲦	fu,p^hu		𐲦 𐲨	fu,p^hu-u
	富＜fu/fuw＞	𐲦 𐲨	fu,p^hu-u	駙＜fu/vu＞	𐲦	fu,p^hu
	傅＜fu/fu[18]＞	𐲦	fu,p^hu		𐲧	fu,p^hu
		𐲦 𐲨	fu,p^hu-u	妃＜fui/fi＞	𐲥 𐲩	p^h,f-i
	奉母					
	防＜fuaŋ/vaŋ＞	𐲥 𐲮	p^h,f-uɑŋ			
	防＜fuaŋ/vaŋ＞	𐲧 𐲮	fu,p^hu-uɑŋ			
	父＜fu/fu＞	𐲦	fu,p^hu			
	輔＜fu/vu＞	𐲦 𐲨	fu,p^hu-u			
		𐲧 𐲩	fu,p^hu-u,iu			

「賓」𐲍 𐲦 は、漢字音との対応には問題がないが、𐲍 ɑn は𐲎 ɑn の異字と考えられているため、漢字音にうまく合わない表記である。原因はよくわからない。

p-は、多くが𐲢 によって表記される。一方、p^h-および f-は、𐲥 、𐲦 、𐲧 によって表記される。「部」𐲥 𐲩 、𐲥 𐲨 の例外はあるものの、基本的には契丹小字では

[17] 「驃」は『中原音韻』に収録されていないが、中古音では声調のみが異なる「鰾」の中世漢語音が piau であることから、piau と推定した。

[18] 「傅」は Coblin(2007)には収録されていないが、中古音が同音の「賦」のパスパ漢字音が fu であることから、fu と推定した。

p-は、p^h-や f-とは区別して表記されるが、p^h-と f-は区別されていないといえる。このことから、契丹語では[p^h]と[f]の対立は非弁別的であったが、[p]と[p^h]、[p]と[f]の対立は弁別的であったと考えられる。モンゴル諸語では[f]は一般的ではないことを考慮し、これらの表記の差は p と p^hの対立を反映したものと考える。

孫(2007)は𗍫 が漢字音表記専用の文字であると言うが、「天慶[19]」を意味する𗍫𗤶𗥃𗦳𗧓 のように固有語の表記に𗍫 が用いられた例があるので、漢字音専用の文字であるとは考えない。

以上より、p、p^h、m、(v)の音を認める。

原字の音価推定

以上の議論より、唇音の表記に用いられる原字を初頭子音によって以下のように分類できる：

初頭子音 m　　𘖚
初頭子音 v　　𘗕
初頭子音 p　　𗾞、𗿼
初頭子音 p^h　　𘝦、𗍫、𗍫

𘖚、𘗕、𗾞、𗿼、𘝦 は、単独で漢字音を表記することがないことや、結合する母音に制限が見られないことから、それぞれ、𘖚 m、𘗕 v、𗾞 p、𗿼 p、𘝦 p^hを表示していたと考える。

[19] 遼天祚帝の治世で使用された元号。1111-1120 年。

3.2.2 歯茎音

先行研究のまとめ

- 聶(1988)は契丹語の t、s、n、l によって歯茎音の声母を表記したとする。また、音訳漢字に、精母(*ts-)、清母(*ts^h-)、従母(*dz-)の漢字は 1 つも使われないので、契丹語にはもともと ts-と ts^h-がないという。
- 愛新覚羅(2004)は、歯茎音の表記に用いられる原字に t、d、s、n、l の音価を与えている。
- 孫(2007)は、契丹語の口語に ts-はなく、𠑊 は漢語専用の文字であるという。

契丹語での弁別

表 4

n-	泥母					
	男＜nam/nam＞	𐢠𐢢	nɑ-ɑm	寧＜niəŋ/niŋ＞	𐢡𐢣	n-iŋ
	奴＜nu/nu＞	𐢡𐢲	n-u		𐢡𐢦𐢣	n-i-iŋ
	内＜nui/nuĕ＞	𐢡𐢵	n-uei	農＜nuŋ/nuŋ＞	𐢡𐢲𐢶	n-u-uŋ
l-	來母					
	蘭＜lan/lan＞	𐢧𐢠𐢱	l-ɑ-ɑn	練＜liɛn/lɛn＞	𐢧𐢳𐢫	l-ie-en
		𐢧𐢠𐢴	l-ɑ-ɑn	梁＜liaŋ/ljaŋ＞	𐢧𐢬	l-iɑŋ
	廊＜laŋ/laŋ＞	𐢧𐢷	l-ɑŋ	龍＜liuŋ/lyuŋ＞	𐢧𐢮	l-uŋ
	郎＜laŋ/laŋ＞	𐢧𐢷	l-ɑŋ	陵＜liəŋ/liŋ＞	𐢧𐢣	l-iŋ
	洛＜lɑu/law＞	𐢧𐢹𐢲	l-ɑu-u	領＜liəŋ/liŋ＞	𐢧𐢣	l-iŋ
	禄＜lu/lu＞	𐢲	lu	令＜liəŋ/liŋ＞	𐢧𐢣	l-iŋ
		𐢲𐢳	lu-u	留＜liəu/liw＞	𐢧𐢰	l-iou
		𐢧𐢳	lu-u	遼＜liau/lɛw＞	𐢧𐢯	l-iɑu
	李＜li/li＞	𐢧𐢦	l-i	礼＜li/li＞	𐢧𐢦	l-i
	略＜liau/lɛw＞	𐢧𐢯𐢲	l-iɑu-u	醴＜li/li＞	𐢧𐢦	l-i
	婁＜ləu/ləu＞	𐢧𐢵	l-ou			

𐢲 は単独で十二支の「辰」を表す表意文字であり、モンゴル諸語に見られる lu:「龍」に対応すると考えられる。したがって、𐢲 による「禄」の表記は、仮借によるものであると考えられる。

n-は𗈪、𗈫で表記される。𗈪、𗈫が他の声母の表記に用いられることはない。

l-は𗈬、𗈭で表記される。𗈬、𗈭が他の声母の表記に用いられることはない。

これらの文字は契丹語の固有語にも用いられるものであり、契丹語にもn、lに相当する音が独立して存在していたと考えられる。

表 5

t-	端母			定母(仄声)		
	点＜tiɛm/dɛm＞	𗗙𗅋𗍫	t,t^{h}-ie-em	殿＜tiɛn/dɛn＞	𗗙𗅋𗍏	t,t^{h}-ie-en
		𗍫𗍫	t,t^{h}-em		𗍫𗅋𗍏	t,t^{h}-ie-en
		𗍫𗍬？	t,t^{h}-tʃur	袋＜tai/daj＞	𗗙𗂧𗅇	t,t^{h}-ɑi-i
	敦＜tuən/tun＞	𗍫𗥃	t,t^{h}-i,j	大＜tai/daj＞	𗍪	tɑi,t^{h}ɑi
	都＜tu/tu＞	𗀹	tu		𗗙𗂧𗅇	t,t^{h}-ɑi-i
	帝＜ti/ti＞	𗏁	ti		𗂡𗂧	t-ɑi
		𗏁？			𗆫𗂧	t-ɑi
		𗗙𗅇𗅇	t,t^{h}-i-i		𗆫𗂧𗅇	t-ɑi-i
	得＜tei/təj＞	𗗙𗃰	t,t^{h}-i,j		𗍫𗂧𗅇	t,t^{h}-ɑi-i
	德＜tei/təj＞	𗗙𗃰	t,t^{h}-i,j	道＜tɑu/daw＞	𗁅𗂅	tɑ-u
					𗁅𗂅	u,iu-u
				度＜tu/du＞	𗀹	tu
					𗗙𗁅	t,t^{h}-u,iu
					𗗙𗆫	t,t^{h}-g,gu
t^{h}-	透母			定母(平声)		
	天＜thiɛn/t'ɛn＞	𗗙𗅋𗍏	t,t^{h}-ie-en	团＜thuɔn/dɔn＞	𗏾𗍰	t^{h}o-ɔn,on
	通＜thuŋ/t'uŋ＞	𗗙𗏒	t,t^{h}-uŋ	唐＜thaŋ/daŋ＞	𗀛𗂔	t^{h}ɑ-ɑŋ
		𗗙𗍬	t,t^{h}-uŋ	同＜thuŋ/duŋ＞	𗋕𗍬	t^{h}-uŋ
	統＜thuŋ/t'uŋ＞	𗋕𗍬	t^{h}-uŋ		𗋕𗏒	t^{h}-uŋ
	太＜thai/t'aj＞	𗍪	tɑi,t^{h}ɑi	徒＜thu/du＞	𗋕	t^{h}
	台＜thai/t'aj＞	𗍪	tɑi,t^{h}ɑi			
	討＜thɑu/t'aw＞	𗔞	t^{h}-ɑu	定母(仄声)		
				特[20]＜thei/dəj＞	𗗙𗃰	t,t^{h}-i,j
					𗍫𗃰	t,t^{h}-i,j

[20]「特」は仄声であるが、中世漢語音では例外的にt^{h}-に変化している。

「道」𗼇𗼈 は、字形の類似による𗼇𗼈 の誤写であると考えられる。「帝」𗼉 は、字形の類似による𗼉 の誤写と考えられる。

𗼋 は契丹語の固有語の表記に用いられた例は確認されていないので、漢字音表記専用の文字である可能性がある。

「討」の表記に用いられる𗼌 は、数詞の 5 を表す表意文字である。『遼史』では契丹語の 5 を「討」＜thɑu/t'aw＞によって音写している。従って𗼌 による「討」の表記は仮借によるものであり、𗼌 は tau を表示していたと考える。

t-と t^h-の表記に用いられる文字が、t-と t^h-以外の声母の表記に使われる例はない。しかし、𗼏 、𗼍 、𗼋 などの原字は、t-と t^h-のどちらも表記することがある。[p]と[p^h]の対立は弁別的であったと考えられるので、音韻目録の対称性を考えると[t]と[t^h]の対立も弁別的であった可能性はあるが、漢字音との対応からはそれを示すことはできない。

徒＜thu/du＞	𗼆	t^h
都＜tu/tu＞	𗼅	tu

の例のように、声母だけが異なる漢字音が違う原字によって記された例はあるものの、混同された例は多く例外的であるということはできない。混同された例を重視し契丹語ではひとつの歯茎閉鎖音 t のみが独立して存在していたと考える。

𗼏 や𗼍 は、「封ずる」を意味する𗼏 𗼐 𗼑 𗼒 𗼓 (𗼍 𗼐 𗼑 𗼒 𗼓)など契丹語の固有語にも用いられるので、契丹語にも t あるいは t^hに相当する音があったと考えられる。また、固有語でも同じ語を𗼏 と𗼍 のどちらで表記することもあり、これらの文字がどのように使い分けられていたのかははっきりとはわからない。契丹語では語頭での t と t^hの対立があいまいであったのかもしれない。

表 6

s-	心母					
	三＜sam/sam＞	仝 为 乃	s-ɑ-ɑm	先＜siɛn/sjɛn＞	仝 文 专	s-ie-en
	散＜san/san＞	仝 为 乑	s-ɑ-ɑn	仙＜siɛn/sjɛn＞	仝 文 专	s-ie-en
	相＜siaŋ/sjaŋ＞	仝 爿	s-iɑŋ	宣＜siuɛn/syɛn＞	仝 𠂇 虫	s-ue-en
	宋＜suŋ/suŋ＞	仝 𠂆	s-uŋ	相＜siaŋ/sjaŋ＞	仝 彳？	s-lu
		仝 𠂤	s-uŋ	西＜si/si＞	仝 𠂢	s-i
		仝 𠂉	s-uŋ	賜＜sï/sɿ＞	廿	sï
	修＜siəu/siw＞	仝 丙	s-iou	小＜siau/sjɛw＞	仝 𠂒	s-iɑu
	司＜sï/sɿ＞	廿	sï			
ts-	精母					
	宗＜tsuŋ/tsuŋ＞	仝 𠂤	s-uŋ	晋＜tsiən/tsin＞	仝 冉	ts-in
		仝 𠂆	s-uŋ	進＜tsiən/tsin＞	仝 冉	ts-in
		仝 𠂤	ts-uŋ	将＜tsiaŋ/tsjaŋ＞	仝 爿	s-iɑŋ
	酒＜tsiəu/tsiw＞	仝 丙	s-iou		仝 朴	s-iɑŋ
		仝 丙	ts-iou		仝 爿	ts-iɑŋ
	子＜tsï/tsɿ＞	仝 𠂆	s-ï		仝 丬	s-iɑŋ
		仝 𠂆	ts-ï		仝 彳？	s-lu
		仝 𠂇	ts-ï	済＜tsi/tsi＞	仝 𠂢	ts-i
	紫＜tsï/tsɿ＞	仝 𠂆	s-ï	祭＜tsi/tsi＞	仝 𠂢	ts-i
	紫＜tsï/tsɿ＞	仝 𠂆	ts-ï	節＜tsiɛ/tsjɛ＞	仝 文	ts-ie
	祖＜tsu/tsu＞	仝 𠂎	s-u		仝 文	s-ie
		仝 𠂎	ts-u			
	左＜tsuɔ/tsɔ＞	仝 及	s-o,uə	従母(仄声)		
		仝 及	ts-o,uə	静＜tsiəŋ/dziŋ＞	仝 闩	ts-iŋ
ts^h-	清母			従母(平声)		
	千＜tshiɛn/ts'jɛn＞	仝 文 专	s-ie-en	前＜tshiɛn/dzɛn＞	仝 文 专	s-ie-en
	清＜tshiəŋ/ts'iŋ＞	仝 闩	s-iŋ	秦＜tshiən/dzin＞	仝 冉	s-in
	青＜tshiəŋ/ts'iŋ＞	仝 闩	s-iŋ	曹＜tshɑu/dzaw＞	仝 𠂤	s-ɑu
	採＜tshai/ts'aj＞	仝 𠂎	s-ɑi	斉＜tshi/dzi＞	仝 𠂢	s-i
	刺＜tshï/ts'ɿ＞	廿	sï		仝 𠂢 𠂢	s-i-i
		仝 𠂆	s-ï		𠂉	ts^hi
		𠂉 𠂇	ts^hi-ï			
	漆＜tshi/ts'i＞	仝 𠂢	s-i			
		仝 𠂢	ts-i			
		𠂉 𠂢	ts^hi-i			

摩擦音と破擦音の表記には混同が見られる。𘍀は、s-、ts-、ts^h-のすべての子音の表記に使用されている。一方、𘍁は主に ts-、𘍂は主に ts^h-の表記に用いられ、s-の表記に用いられた例はない。また、𘍃は s-と ts^h-の表記に用いられるが、ts-を記した例はない。これらの原字のうち、𘍀は契丹語の固有語の表記に用いられている例があるが、そのほかの文字は契丹語の固有語で用いられた例が確認されていない。吉池(2003)は、𘍂が蕭仲恭墓誌(1150 年)や金代博州防御使墓誌(1170 年)などの後期の資料にのみ見られる文字であることを根拠に、𘍂や𘍁は漢字音の分析と正書法の改善により作られた漢字音表記専用の文字であると推測している。これらの指摘は妥当であると考えられるので、𘍁、𘍂は漢字音の表記専用の文字であり、これらの原字による弁別は契丹語本来の音韻体系を反映したものではないと考える。

したがって、契丹語では[s]、[ts]、[ts^h]の対立は弁別的ではなく、契丹語ではひとつの歯茎摩擦音 s のみが独立して存在していたと考える。

以上より、契丹語の歯茎音として l、n、t、s、(ts)、(ts^h)の音を認める。

原字の音価推定

以上の議論より、唇音の表記に用いられる原字を初頭子音によって以下のように分類できる：

初頭子音 n　　𘍄、𘍅
初頭子音 l　　𘍆、𘍇
初頭子音 t　　𘍈、𘍉、𘍊、𘍋、𘍌、𘍍、𘍎、𘍏、𘍐、𘍑、𘍒
初頭子音 s　　𘍀、𘍃
初頭子音 ts　　𘍁
初頭子音 ts^h　　𘍂

𘍅、𘍆、𘍈、𘍉、𘍀、𘍁は、単独で漢字音を表記することがないことや、結合する母音に制限が見られないことから、それぞれ、𘍅 n、𘍆 l、𘍈 t、𘍉 t、𘍀 s、𘍁 ts を表示していたと考える。

また、モンゴル諸語に見られる lu:「龍」との対応から、𘜶 は lu を表示していたと考える。

𘜘 (久)、𘜓 、𘜔 、𘜕 は、用例が少なく詳細に音価を検討するのは困難であるが、特定の漢字音の表記にしか用いられないことから、母音を伴った音節文字と考え、それぞれ、𘜘 (久)ta、𘜓 na、𘜔 tɔ、𘜕 ta を表示していたと考える。

3.2.3 後部歯茎音

当時の漢字音の声母には後部歯茎音はないが、アルタイ諸語ではそり舌音は一般的ではないので、契丹語ではそり舌音の声母を後部歯茎音で代替したと考える。したがって、ここではそり舌音の声母との対応から、契丹語の後部歯茎音の弁別について検討する。

先行研究のまとめ

- 聶(1988)は、契丹語の tʃ、ʃ、ʒ によってそり舌音の声母を表記したとする。
- 愛新覚羅(2004)は、そり舌音の声母の表記に用いられる原字に tʃ、ʃ、dʒ、ʒ の音価を与えている。
- 孫(2007)は、契丹語には ʐ-がなく、𗼇 は漢語専用の文字であるという。また、契丹語の口語では、漢語の tʂ-と tʂʰ-を区別することが困難であったという。

契丹語での弁別

表 7

ʂ-	生母			書母		
	山＜ʂan/ʂan＞	𘟙𘠩𘥈	ʃ-ɑ-ɑn	沈＜ʂiəm/ʂim＞	𘟙𘠪	ʃ-ən
	省＜ʂəŋ/ʂəŋ＞	𘟙𘠫	ʃ-iɑŋ	聖＜ʂiəŋ/ʂiŋ＞	𘟙𘡀	ʃ-ŋ
	使＜ʂï/ʂʅ＞	𘟙𘡁	ʃ-i		𘟙𘡂	ʃ-iŋ
		𘠦	is	室＜ʂi/ʂi＞	𘟙𘡁	ʃ-i
		𘠧	ʂï	叔＜ʂiu/ʂy＞	𘟙𘠬	ʃ-ou
		𘠧𘠨	ʂï-ï		𘟙𘠬𘡃	ʃ-ou-iu
	史＜ʂï/ʂʅ＞	𘠧	ʂï		𘟙𘡃	ʃ-iu
	師＜ʂï/ʂʅ＞	𘟙𘡁	ʃ-i	書＜ʂiu/ʂy＞	𘟙𘠭	ʃ-iu
		𘠧	ʂï	少＜ʂiau/ʂɛw＞	𘟙𘡄𘥉	ʃ-iɑu-u
	帥＜ʂuai/ʂu＞	𘟙𘠮	ʃ-uei	守＜ʂiəu/ʂiw＞	𘟙𘠬	ʃ-ou
	率＜ʂuai/ʂu＞	𘟙𘠯	ʃ-o,uə	水＜ʂui/ʂuĕ＞	𘟙𘠰	ʃ-uei
					𘟙𘠱	ʃ-uei
	禪母(仄声)					
	尚[21]＜ʂiaŋ/ʐɑŋ＞	𘟙𘠲	ʃ-ɑŋ	崇母		
	上＜ʂiaŋ/ʐɑŋ＞	𘟙𘠲	ʃ-ɑŋ	事＜ʂï[22]/dzʯ＞	𘠧	ʂï
	十＜ʂi/ʐi＞	𘟙𘠳	ʃ-p		𘠧𘠨	ʂï-ï
	侍＜ʂï/ʐi＞	𘠧	ʂï		𘠧𘠨	ʂï-ï
		𘠧𘠨	ʂï-ï			
		𘠧𘠨	ʂï-ï	昌母		
	氏＜ʂï/ʐi＞	𘠧	ʂï	枢[23]＜tʂhiu/tʂ’y＞	𘟙𘠭	ʃ-iu
	淑＜ʂiu/zy＞	𘟙𘠴𘥉	ʃ-iu-u			
	署＜ʂiu/zy＞	𘟙𘠭	ʃ-iu			
	蜀＜ʂiu/zy＞	𘟙𘠵	ʃ-u			
	壽＜ʂiəu/ʐiw＞	𘟙𘠬𘥉	ʃ-ou-u			

[21] 長田(1991)は、禅母の「尚」は声調が異なる 2 種類の発音があり、「尚父」の「尚」と「尚書」の「尚」は声調が異なっており、「尚」𘟙𘠲、「尚」𘠪𘠲などの表記の違いは当時の漢字音の発音の違いによるものであると言う。

[22] 「事」は『中原音韻』に収録されていないが、中古音では声調のみが異なる「士」の中世漢語音が ʂï であることから、ʂï と推定した。

[23] 「枢」は例外的に ʂ-に変化した(王 1980:141)。

ʐ-	日母 仁＜ʈiən/rin＞　𗼇 𗴼　ʐ-in 如＜ʈiu/ry＞　𗼆 𗵆　?-iu

ʂ-は主に𗼇 、𗼈 によって表記される。ʐ-は主に𗼆 によって表記される。ʂ-と ʐ-の表記が混同されることはない。ʐ-の例外的な表記としては、「如」𗼆 𗵆 がある。𗼆 は漢字音の表記に用いられるのは 1 例である。𗼇 、𗼈 、𗼆 が他の声母の表記に用いられることはない。このことから、契丹語では[ʃ]と[ʒ]の対立は弁別的であったと考える。さらに、これらの子音と[tʃ]および[tʃʰ]の対立も弁別的であったと考える。

ʐ-を表記する𗼆 は吉如何(2007)の統計によると、合成字の第一原字としての用例が 20 あるのみである。ʒ が契丹語の音素であるとすると、𗼆 の出現数は非常に少なく出現する場所も偏っていることになる。したがって、契丹語には本来 ʒ はなく、𗼆 は漢字音の表記専用の文字であると考える。

「使」𗴲 の表記は、𗴲 is の推定音価から考えると奇妙である。ここで、𗴲 is の音価推定の過程を述べる。『遼史』に契丹語で「孝」は得失得本<中世漢語音 tei ʂi tei puən>(あるいは赤寔得本<中世漢語音 tʂhi ʂi[24] tei puən>)と言うと記載されており、それに対応する契丹小字は𗴴 𗵘 𗴲 𗵔 𗵓 𗵕 tʃ,tʃʰ-i-is-t,tʰ-p-no,on であることが知られていた。音写漢字「失」、「寔」との対応と、𗴲 が 9(モンゴル文語の形式は yisu)を意味することが考慮され、𗴲 の音価は is と推定された(清格爾泰ほか 1985:111)。しかし、漢文資料での音写や漢字音の表記から考えると、ʃi を表示していたと考えるのが妥当であろう。

[24] 「寔」は『中原音韻』に収録されていないが、中古音では韻母が同音である「識」の中世漢語音が ʂi であることや、声母の歴史変化を考慮し ʂi と推定した。

表 8

tʂ-	章母			知母	
	章＜tʂiaŋ/tʂaŋ＞	𗼇𗴲	tʃ-ɑŋ	鎮＜tʂiən/tʂin＞	𘜶𗍫	tʂï-in
		𘝦𗴲	tʃ,tʃʰ-ɑŋ	中＜tʂiuŋ/tʂuŋ＞	𗹦𗴽	tʃ-uŋ
	彰＜tʂiaŋ/tʂaŋ＞	𗼇𗴲	tʃ-ɑŋ	忠＜tʂiuŋ/tʂuŋ＞	𗹦𗴽	tʃ-uŋ
	政＜tʂiəŋ/tʂiŋ＞	𘜶𗏵	tʂï-iŋ	知＜tʂi/tʂi＞	𘜶	tʂï
	正＜tʂiəŋ/tʂiŋ＞	𘜶𗏵	tʂï-iŋ			
	職＜tʂi/tʂi＞	𘜶	tʂï	澄母(仄声)		
	主＜tʂiu/tʂy＞	𘜶𗒼	tʂï-iu	鄭＜tʂiəŋ/dʐiŋ＞	𘜶𗏵	tʂï-iŋ
		𘜷𗒼	tʂï-iu	趙＜tʂiau/dʐɛw＞	𘜷𗂧	tʂï-iɑu
	諸＜tʂiu/tʂy＞	𘜷𗒼	tʂï-iu			
	招＜tʂiau/tʂɛw＞	𗼈	tʃɑu,tʂɑu			
	昭＜tʂiau/tʂɛw＞	𘝦𗂧	tʃ,tʃʰ-iɑu			
		𘜷𗂧	tʂï-iɑu			
	州＜tʂiəu/tʂiw＞	𘝦𗦳	tʃ,tʃʰ-ou			
tʂʰ-	初母			禪母(平声)		
	冊＜tʂhai/tʂ’aj＞	𘝦𗖵	tʃ,tʃʰ-ɑi	臣＜tʂhiən/ʐin＞	𘝦𗐱	tʃ,tʃʰ-ən
		𘝦𗍑	tʃ,tʃʰ-ɑi		𘝦𗍫	tʃ,tʃʰ-in
	察＜tʂha/tʂ’a＞	𗹦	tʂʰɑ,ʂʰɑ		𘝧𗍫？	?-in
	楚＜tʂhu/tʂ’u＞	𘝦𗔅	tʃ,tʃʰ-u	尚[25]＜tʂhiaŋ/ʐaŋ＞	𗹦𗴲	tʂʰɑ,ʂʰɑ-ɑŋ
					𘝦𗴲	tʃ,tʃʰ-ɑŋ
	昌母			承＜tʂhiəŋ/ʐiŋ＞	𘝦𗏵	tʃ,tʃʰ-iŋ
	春＜tʂhiuən/tʂ’yn＞	𘝦𗗠	tʃ,tʃʰ-iun	丞＜tʂhiəŋ/ʐiŋ＞	𘝦𗡶	tʃ,tʃʰ-ŋ
	昌＜tʂhiaŋ/tʂ’aŋ＞	𗹦𗴲	tʂʰɑ,ʂʰɑ-ɑŋ			
	充＜tʂhiuŋ/tʂuŋ＞	𗼭𗴽	tʂʰu-uŋ	澄母(平声)		
				陳＜tʂhiən/dʐin＞	𘝦𗍫	tʃ,tʃʰ-in
	崇母			長＜tʂhiaŋ/dʐaŋ＞	𗹦𗴲	tʂʰɑ,ʂʰɑ-ɑŋ
	崇＜tʂhiuŋ/dʐuŋ＞	𗹦𗵘	tʂʰ-uŋ	持＜tʂhi/dʐi＞	𘝦𗔇	tʃ,tʃʰ-i
				朝＜tʂhiau/dʐɛw＞	𘝦𗂧	tʃ,tʃʰ-iɑu

「臣」𘝧𗍫 は、字形の類似による𘝦 の誤写であると考えられる。「主」𘜷𗒼 ~𘜶𗒼 のように同じ漢字音が𘜷 と𘜶 のどちらでも表記されることや、字形が似ていることを考えると、𘜷 は𘜶 の異字である可能性がある。「招」の表記に用いられる𗼈 は、数詞の 100 を表す表意文字である。また、『遼史』では、契丹語の 100 は「爪」

[25] 注 21 を参照。

＜tʂau/tʂaw＞によって音写される。従って𗼇による「招」の表記は仮借によるものであり、𗼇はtʃauを表示していたと考える。

𗹦は、tʂ-と tʂʰ-のどちらの声母の表記にも用いられる。しかし、𗹦以外の原字ではこの現象は見られず、𗴲、𗵆、𗾞、𗵘はtʂ-の表記にのみ用いられ、𗼒、𗼓、𗼠はtʂʰ-の表記にのみ用いられる。今回収集したデータでは、𗹦はtʂʰ-の表記に用いられる例が多い。𗹦が tʂ-の表記に用いられたものとしては、耶律迪烈墓誌銘(1092年)に「章」𗹦𗴺が2例、蕭仲恭墓誌(1150年)に「昭」𗹦𗾔が1例ある。また、資料に関係なく「州」は𗹦𗵞と表記される。これらがなぜ𗹦によって表記されるのははっきりとは分からないが、𗹦以外の tʂ-と tʂʰ-の表記に用いられる原字では混同が見られないこと、𗹦の用例が tʂʰ-の表記に偏っていることを考慮し、契丹語では[tʃ]と[tʃʰ]は弁別的であり、tʃ、tʃʰの音が独立して存在していたと考えたい。

以上の議論から、ʃ、tʃ、tʃʰ、(ʒ)の音を認める。

原字の音価推定

以上の議論より、唇音の表記に用いられる原字を初頭子音によって以下のように分類できる：

初頭子音ʃ　　𗴱、𗵍、𗿀
初頭子音ʒ　　𗴳
初頭子音tʃ　　𗾞、𗴲、𗵆、𗼇、𗵘
初頭子音tʃʰ　　𗹦、𗼒、𗼠、𗼓

𗴱、𗴳、𗹦は、単独で漢字音を表記することがないことや、結合する母音に制限が見られないことを考え、それぞれ、𗴱ʃ、𗴳ʒ、𗹦tʃʰを表示していたと考える。

𗾔が用いられた例は1つしかないことや、本来契丹語になかった音素に対応していると考えられることから、𗾔の音価の推定は保留する。

𗾞はa、𗵘はu、𗼒はa、𗼠はu、𗼓はɯを主母音とする韻母に結合することから、それぞれ、𗾞tʃa、𗵘tʃu、𗼒tʃʰa、𗼠tʃʰu、𗼓tʃʰɯを表示していたと考える。韻母の音価については4章を参照されたい。

3.2.4 軟口蓋音

先行研究のまとめ

・ 聶(1988)では、軟口蓋音の声母の表記に使われる契丹語の子音として k、q、x、ŋ を認めている。それぞれの子音に対応する原字を次のように分類している：

k　例字：𘟙 、𘠽
x　例字：𘠾 、𘡊 、𘡛 、𘡜
q　例字：𘟗 、𘟚 、𘡘 、𘡝
ŋ　例字：𘠿

・ 愛新覚羅(2004)では、軟口蓋音の声母の表記に使われる契丹語の子音として k、g、q、x、ŋ を認めている。本論文で扱う軟口蓋音の声母の表記に用いられる原字には、次のような推定音価を与えている：

𘠽 go、𘟙 g、𘟗 x/k、𘡘 q/qa、𘡝 qio、𘟚 xu、
𘡝 qa/qan、𘠾 xəu、𘡛 xia、𘡞 xo、𘡊 xuaŋ、𘡜 q、𘠿 əŋ/ŋ

・ 孫(2007)は、𘠿 は漢語専用の文字であるという。

契丹語での弁別

表 9

ŋ-	疑母					
	元＜iuɛn/ɦyɛn＞	𘠿 𘡏 𘡑	ŋ-ue-en	銀＜iən/ŋin＞	𘠿 𘡒	ŋ-in
		𘠿 𘡏 𘠼	ŋ-ue-n	儀＜i/ŋi＞	𘠿 𘡔	ŋ-i
		𘠿 𘡏 𘡐	ŋ-ue-en	宜＜i/ŋi＞	𘠿 𘡔	ŋ-i
	五＜u/u＞	𘠿 𘡍	ŋ-u	義＜i/ŋi＞	𘠿 𘡔	ŋ-i
	吳＜u/u＞	𘠿 𘡍	ŋ-u	魚＜iu/ɦy＞	𘠿 𘡍	ŋ-u
	吾＜u/u＞	𘠿 𘡍	ŋ-u	御＜iu/ɦy＞	𘠿 𘡎	ŋ-iu
	魏＜ui/ɦuɛ̌＞	𘠿 𘡋	ŋ-uei	牛＜iəu/ŋiw＞	𘠿 𘡓	ŋ-iou
		𘠿 𘡋 𘡔	ŋ-uei-i			
		𘠿 𘡋 ？	un-uei			

「魏」<u>𗼇</u>𗼈 は字形の類似による、𗼇𗼈 の誤写と考えられる。

ŋ-はすべて𗼇 で記され他の声母との混同は見られない。また、この原字は-ŋ 韻尾の表記にも用いられる。このことは疑母がまだ鼻音性を保っていたことを示している。𗼇 は契丹語の固有語で用いられた例が確認されておらず、漢字音の表記専用の文字である可能性がある。

表 10

k-	見母						
	監＜kiam/kjam＞	𘓱𘓻𘓵	k-iɑ-ɑm		光＜kuaŋ/kwaŋ＞	𘓱𘓽	k-uɑŋ
		𘓱𘓻𘓴	k-iɑ-em		廣＜kuaŋ/kwaŋ＞	𘓱𘓽	k-uɑŋ
	兼＜kiɛm/kjɛm＞	𘓱𘓼𘓴	k-ie-em		高＜kɑu/kaw＞	𘓱𘓾	k-ɑu
	検＜kiɛm/kɛm＞	𘓱𘓳？	k-?		誥＜kɑu/kaw＞	𘓱𘓾	k-ɑu
		𘓱𘓴	k-em		校＜kau/kjaw＞	𘓱𘓿	k-iɑu
		𘓱𘓼𘓴	k-ie-em			𘓱𘓿𘓸	k-iɑu-u
	金＜kiəm/kim＞	𘓱𘓹	k-m		家＜kia/kja＞	𘓱𘓻	k-iɑ
	斤＜kiən/kin＞	𘓱𘓶	k-in		九＜kiəu/kiw＞	𘓱𘓷	k-iou
	軍＜kiuən/kyn＞	𘓰𘓽？	ʃ-un,unj		車＜kiu/ky＞	𘓱𘓺	k-iu
		𘓱𘓲	k-iun		姑＜ku/ku＞	𘓱𘓸	k-u
	官＜kuɔn/kɔn＞	𘓫𘓳	ko-n		貴＜kui/kuĕ＞	𘓱𘓼	k-uei
	觀＜kuɔn/kɔn＞	𘓫𘓳	ko-n		国＜kui/kuĕ＞	𘓱𘓼	k-uei
		𘓱𘓾𘓯	ko-o,uə-on,ɔn		圭＜kui/kyĕ＞	𘓱𘓼	k-uei
	江＜kiaŋ/kjaŋ＞	𘓱𘓰	k-ɑŋ		哥＜kɔ/kɔ＞	𘓱𘓶	k-e
	耿?＜kiəŋ/kjiŋ＞	𘓱𘓬	k-iɑŋ			𘓱𘓷	k-e
	経＜kiəŋ/kjiŋ＞	𘓱𘓭	k-iŋ				
	景＜kiəŋ/kiŋ＞	𘓱𘓭	k-iŋ		群母(仄声)		
	京＜kiəŋ/kiŋ＞	𘓱𘓭	k-iŋ		郡＜kiuən/gyn＞	𘓱𘓺𘓲	k-iu-iun
	宮＜kuŋ/kyuŋ＞	𘓱𘓷𘓵	k-iou-uŋ			𘓱𘓲	k-iun
	公＜kuŋ/kuŋ＞	𘓱𘓪	k-uŋ		騎＜ki/gi＞	𘓮𘓽？	ol-i
		𘓱𘓵	k-uŋ			𘓱𘓼𘓾	k-ie-i
	功＜kuŋ/kuŋ＞	𘓱𘓵	k-uŋ			𘓱𘓾𘓾	k-i-i
	工＜kuŋ/kuŋ＞	𘓱𘓵	k-uŋ			𘓱𘓽	k-i

表 11

k^h-	溪母			群母(仄声)		
	卿＜khiəŋ/k'iŋ＞	𠂢 𠙵	x,k^h-iŋ	乾＜khiɛn/gɛn＞	𠂤 𠂉	x,k^h-en
	空＜khuŋ/k'uŋ＞	𠂢 𡈼	x,k^h-uŋ	権＜khiuɛn/gyɛn＞	𠃌 𡉈 𠂤	k-ue-en
	慶＜khiəŋ/k'iŋ＞	𠂢 𠙵	x,k^h-iŋ	期＜khi/gi＞	𠂢 𠂒	x,k^h-i
	軽＜khiəŋ/k'jiŋ＞	𠂢 𠙵	x,k^h-iŋ			
	開＜khai/k'aj＞	𠘨 𠀉	k^h-i,j			
		𠘨 𠀤	k^h-ɑi			
		𠃌 𠀤	k-ɑi			
		𠂢 𠀤	x,k^h-ɑi			
	客＜khiai/k'jaj＞	𠂢 𠂤	x,k^h-ɑi			
x-	匣母					
	韓＜han/ɣan＞	𠂆 𠂒	xɑ-ɑn	護＜hu/ɣu＞	𠂋 𠂎	xu-u,iu
	県＜hiɛn/ɣyɛn＞	𠂤 𠂉	x,k^h-en	和＜huɔ/ɣwɔ＞	𠂓	xuo
	賢＜hiɛn/ɣjɛn＞	𠂢 𠂇 𠂉	x,k^h-ie-en	后＜həu/ɣiw＞	𠂉	ɣou
	玄＜hiuɛn/ɣjɛn＞	𠂤 𠂉	x,k^h-en	后＜həu/ɣiw＞	𠂢 ？	ɣou
	混＜huən/ɣun＞	𠂊 𠂇	ɣ,γ-un			
	行＜haŋ/ɣaŋ＞	𠂆 𠂤	h,hɑ-ɑŋ	曉母		
	黄＜huaŋ/ɣɔŋ＞	𠂆	ɣuɑŋ	興＜hiəŋ/xjiŋ＞	𠂢 𠙵	x,k^h-iŋ
	皇＜huaŋ/ɣɔŋ＞	𠂆	ɣuɑŋ		𠂢 𠂒 𠙵	x,k^h-i-iŋ
	弘＜huəŋ/ɣuŋ＞	𠂋 𠂇	xu-ŋ	許＜hiu/xy＞	𠂢 𠂐	x,k^h-iu
	下＜hia/ɣja＞	𠂆	h,hɑ	虎＜hu/xu＞	𠂋	xu
		𠂆 𠂊	h,hɑ-iɑ	徽＜hui/xyĕ＞	𠂢 𠂇	x,k^h-uei
	戸＜hu/ɣu＞	𠂋 𠂎	xu-u,iu		𠂢 𠂇	x,k^h-uei
					𠂢 𠂒	x,k^h-i

水谷(1957)は、有声音声母の無声化は摩擦音である匣母や禅母においてもっとも古い例がみられると言う。したがって、匣母は当時すでに x-になっていたと考えるのが妥当である。「后」𠂉 、「皇」𠂆 、「和」𠂓 などの特定の漢字にしか使われてない文字が匣母にみられるために、一見して匣母と曉母は区別されているように見えるのであろう。

「后」<u>𠂢</u> は字形の類似による、𠂉 の誤写と考えられる。「騎」𠂌 𠂇 の表記は例外的である。𠂌 が他の漢字音の表記に使われた例はない。「軍」𠂈 𠂊 は、推定される音価からは「軍」を表記したとは考えられない。「軍」𠂈 𠂊 は仁懿皇后哀冊(1076

年)の例である。仁懿皇后哀冊は原石が発見されておらず、契丹小字が筆者されたものが伝わっているだけなので、信頼性が他の資料と比べて低いと考えられている。これは、誤写によるものであろう。

k-は、𗈪 で記され、k^h-および x-は𗈫 、𗈬 などで記されている。契丹小字では k-は、k^h-や x-とは区別して表記されているが、k^h-と x-は区別されていないことがわかる。このことから、契丹語では[k^h]と[x]の対立は非弁別的であったが、[k]と[k^h]、[k]と[x]の対立は弁別的であったと考えられる。音素目録の対称性を考慮し、これらの表記の差は k と k^hの対立を反映したものと考える。k^h-と x-が混同され、k^h-が k-と混同されないことは、契丹語の閉鎖音の対立が有声/無声の対立ではなく、fortis/lenis や有気/無気のような対立であったことを示しているかもしれない。

聶(1988)は軟口蓋の閉鎖音は 1 種類しか認めておらず、漢字音の x-と k^h-のどちらの表記にも用いられる原字は、[k^h]や[x]と音声的に似ている q を表示していると言う。愛新覚羅(2004)も子音体系に q を挙げており、𗈬 、𗈭 、𗈮 、𗈯 などに q の音価を与えている。愛新覚羅(2004)は、q を後続する母音の種類と関連付けており、母音調和に付随して生じる子音の異音を想定していると思われる。

契丹語での音素を上記のように k と k^hと考えるならば、積極的に q を想定する理由はなくなるように思われる。また、契丹語の母音調和はまだ十分に解明されているわけではなく、子音の調和の有無・種類や、漢字音との対音における q の分布がはっきりしていない。

庄垣内(2003:62-69)によると、k と q が区別して表記されるウイグル文字で記された漢字音では、k/q の分布は主に韻母の等位と関係しており、牙音(見母、溪母、群母)および喉音(暁母、匣母)の 1・2 等韻母に結合する場合は q が、3・4 等韻母に結合する場合は k で表記されるという。たとえば、「果」(見母果摂 1 等)＜中古音 kuâ[26]＞は q’~q-’ /qa/と記されるのに対し、「迦」(見母果摂 3 等)＜中古音 kɪâ[27]＞は k’ /ka/と記される(庄垣内 2003:62)。契丹小字での表記を見てみると、通摂 1 等の「功」は𗈪𗈫 k-uŋ と表記され、梗摂 4 等の「経」は𗈪𗈦 k-iŋ と表記されるように、結合する韻母の等位に関係なく𗈪によって表記されている。このことは、契丹語には古代ウイグル語のような母音調和に付随して生じる強い子音の調和がなかったことを示しているかもしれない。あるいは、契丹語に入った漢字音は、ウ

[26] 中古音は庄垣内(2003)の表記に従っている。
[27] 注 26 を参照。

イグルの漢字音ほど音韻体系に適応したものではなかったのかもしれない。

これらの理由から、ここでは q の音は認めない。しかしながら、契丹語の動詞語尾において子音の調和と考えられる文字の分布が指摘されており、さらなる検討が必要である[28]。今後の課題としたい。

また、愛新覚羅(2004)の推定音価からは、漢字音の k-の表記に使われる文字に g を、k^h-および x-の表記に使われる文字に k あるいは x の音価を与えており、軟口蓋の摩擦音・閉鎖音として k、g、x の 3 つを認めている。しかし、𗼇 などの原字は、

興＜hiəŋ/xjiŋ＞　　𗼇𗂧　　x,k^h-iŋ
慶＜khiəŋ/k'iŋ＞　　𗼇𗂧　　x,k^h-iŋ

のように、明らかに[k^h]と[x]の対立が非弁別的であったことを示していると考えられるので、k と k^hの音のみを認める。

以上より、契丹語の軟口蓋音として k、k^h、(ŋ)の音を認める。

原字の音価推定

以上の議論より、唇音の表記に用いられる原字を初頭子音によって以下のように分類できる：

初頭子音 ŋ　　𘜘
初頭子音 k　　𘝦 、𗾛
初頭子音 k^h　　𗼇 、𗍫 、𘟙 、𘟣 、𘠷 、𘡊 、𘠽 、𗴢 、𗗙 、𗥃

𘜘 、𘝦 、𗼇 は、単独で漢字音を表記することがないことや、結合する母音に制限が見られないことから、それぞれ、𘜘 ŋ、𘝦 k、𗼇 k^hを表示していたと考える。

---

[28] 清格爾泰(2007)は、契丹語の動詞語尾には母音調和が適用されていると考えられる語尾の組み合わせがあり、

𗾛𗴢　l-ɣ,γ　　:　　𗾛𘝦　l-k
𗥃𗴢𗡶　ul-ɣ,γ-an　　:　　𗥃𘝦𗾞　ul-k-ən

などに見られる𗴢 と𘝦 の対応がモンゴル語の母音調和に付随して生じる子音の異音と類似していることを指摘し、契丹語にもこのような調和があったという。

𐲩 、𐲱 の用例は少なく詳細に音価を検討するのは困難であるが、特定の漢字音の表記にしか用いられないことから母音を伴った音節文字と考え、𐲩 は k^ha、𐲱 は k^hu を表示していたと考えたい。

3.2.5 声門音

先行研究のまとめ

・ 聶(1988)は、影母にはゼロが対応していると言う。

契丹語での弁別

表 12

ʔ-	影母					
	安＜an/ʔan＞	𐲢 𐲭	ɑ-ɑn	尉＜ui/ʔuĕ＞	𐲲	uei
	応＜iəŋ/ʔiŋ＞	𐲣	iŋ		𐲲 □	uei-?
	懿＜i/ʔi＞	𐲤 𐲮	i-i		𐲴	uei
		𐲮 𐲮	i-i		𐲴 𐲮	uei-i
	燕＜ian/ʔjɛn＞	𐲰 𐲯 𐲫	i,j-ie-en		𐲴 𐲵	uei-i

ʔ-の漢字音の表記では、ʔ として分析できる原字はない。また、「安」𐲢 𐲭 は「散」𐲧 𐲢 𐲭 s-ɑ-ɑn、「応」𐲣 は「興」𐲬 𐲣 x,k^h-iŋ、「懿」𐲮 𐲮 は「帝」𐲪 𐲮 𐲮 t,t^h-i-i、「尉」𐲲 は「国」𐲨 𐲲 k-uei などの韻母と同じ表記である。このことから、ʔ-は契丹小字では Ø-が対応していると考えられる。したがって、契丹語では、[ʔ]は音韻的に有意義ではなかったと考える。

原字の音価推定

𐲤 は i を表示していたと考えたい。

3.2.6 半母音

先行研究のまとめ

- 聶(1988)は半母音を認めていない。
- 愛新覚羅(2004)は j を認めている。

契丹語での弁別

中古音声母の以母および云母は中世漢語音では、ゼロ声母(Ø-)であると分析されることがあるが、これらの声母の表記から契丹語の半母音が観察できる可能性があるため、この節でまとめて扱う。これらの声母では中古音の開合の区別によって表記上の違いが見られるので、ほかの声母の場合と異なり、用例を挙げる際には中古音の開合の区別によって分ける。

表 13

云母(開口)			云母(合口)		
右＜iəu/ŋiw＞	丐 𠂤 𢘑	i,j-ou-u	雲＜iuən/ɦwin＞	亦	iun
宥＜iəu/ŋiw＞	丐 𡈼	i,j-ɑu	越＜iuɛ/ɣwɔ＞	奴 爷	ue-e
			遠＜iuɛn/ɦyɛn＞	奴 𠂢	ue-en
			遠?＜iuɛn/ɦyɛn＞	九 𡈽	ju-uɑn,ur
			王＜uaŋ/ɦwaŋ＞	𠂤	uɑŋ
			院＜iuɛn/ɦyɛn[29]＞	奴 𠂢	ue-en
				仲 公	ue-n
			永＜iuəŋ/ɦyuŋ＞	𠂉 口	iu-?
				𠂉 𡍮	iu-ŋ
			衛＜ui/ɦuĕ＞	𤜵	uei
				𤜵 𠂇	uei-i
				𤜵 𠂇	uei-i
				𡍮 𠂇 ?	ŋ-i
				𤜵	uei

[29] 「院」は Coblin(2007)に収録されていないが、中古音が同音の「媛」のパスパ漢字音が ɦyɛn であることから、ɦyɛn と推定した。

表 14

以母(開口)			以母(合口)		
射＜iɛ/jɛ[30]＞	𗍫 𗅋	i,j-ie	用＜iuŋ/jyuŋ＞	𗍫 𗆧 𗄊	i,j-u-uŋ
遊＜iəu/jiw＞	𗍫 𗈪 𗆧	i,j-iou-u			
延＜iɛn/jɛn＞	𗍫 𗅋 𗃞	i,j-ie-en			
	𗊛 𗂧	ue-ən			

「衛」𗏁𗂡 は字形の類似による、𗄊𗂡 の誤写であると考えられる。また、「遠」𗴂𗊛 は漢字音との対応に問題がある可能性がある。

契丹小字での表記を見てみると、云母・以母の開口は、基本的には𗍫 で表記される。「延」𗊛 𗂧 は例外である。𗍫 は、ほぼパスパ漢字音の j と対応しているので、𗍫 は j を表示していたと考えたい。

云母合口の漢字音は、影母と同じく韻母の表記で使用される文字が対応しているものが多く、w として分析できる独立した原字は見られない。したがって、j の音のみを認める。

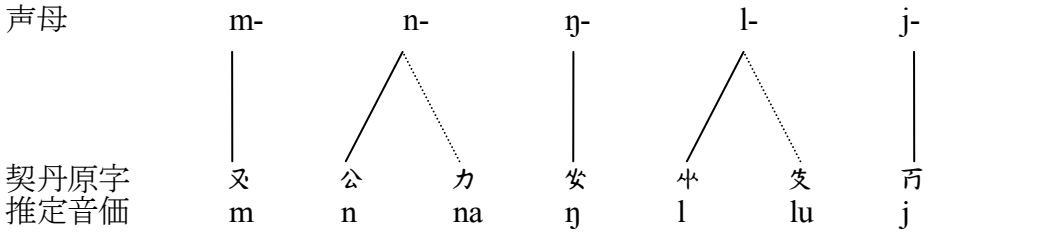
原字の音価推定

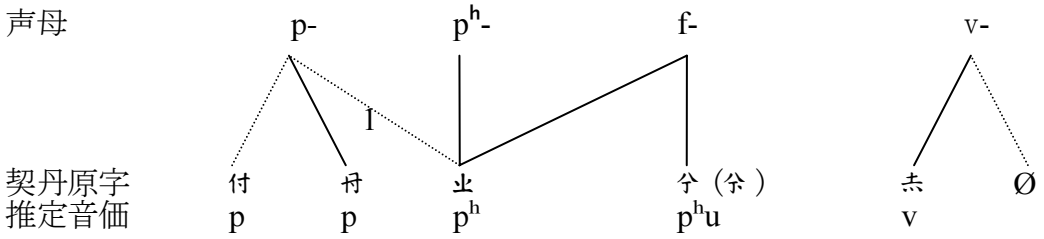
以上の議論より、𗍫 は j を表示していたと考える。

[30] 「射」は Coblin(2007)に収録されていないが、中古音が同音の「夜」のパスパ漢字音が jɛ であることから、jɛ と推定した。

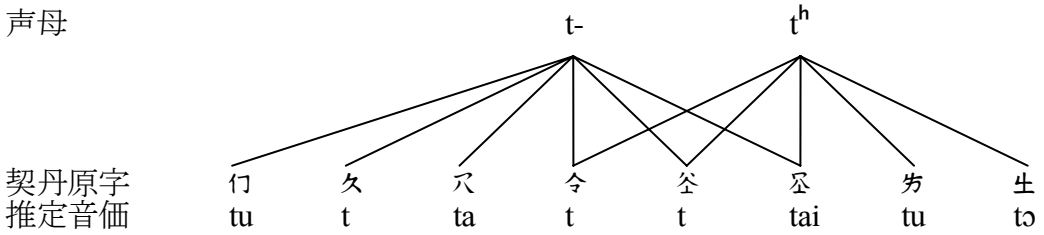
3.3　小結

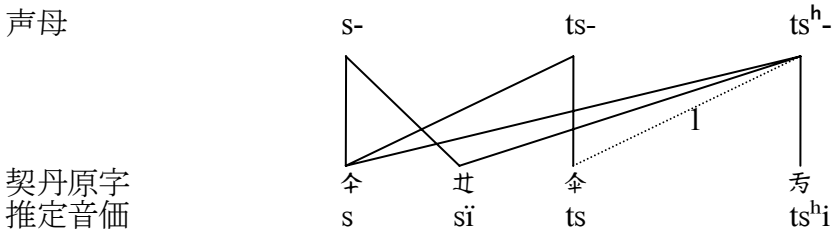
3.2 での議論を踏まえて、声母と契丹原字の対応をまとめる。対応関係を図示するが、破線で示したものは例外的な対応であることを示している。また、原字の推定音価も示すが、音価の推定の際には 4 章で分析することなども考慮している。原字にいくつかの異字がある場合は、中心的と考えられる文字で代表して記している。



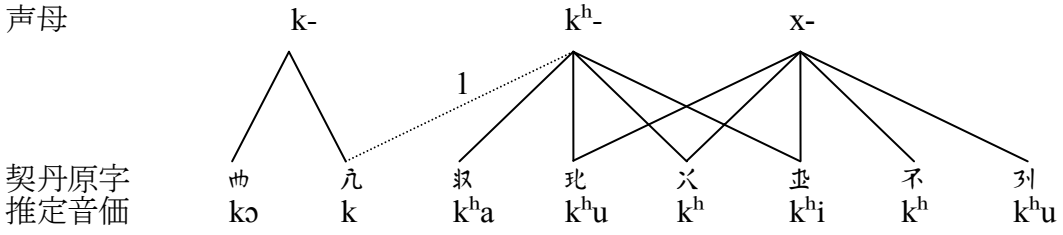


1. 「部」のみ

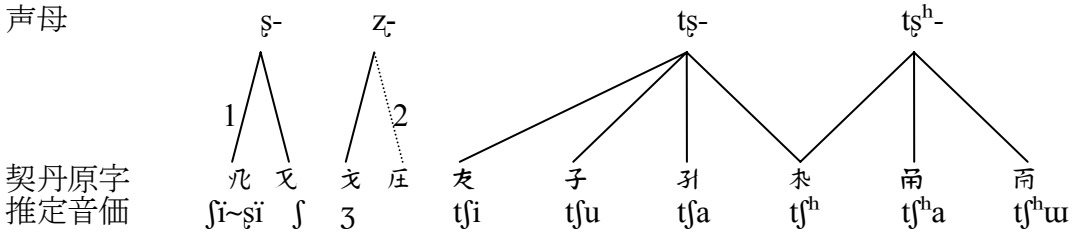




1. 1 例のみ

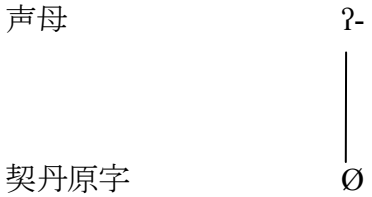


1.2 例のみ



1. 𗼇 は漢字音表記専用の原字であると考えられるので、ここでは例外的に ʂï の音価も与えている。(4.2.4.2 を参照)

2. 音価の推定は保留する。



以上より、漢字音の声母に対応する契丹語の子音として、観察される限り次のものを認める。なお、括弧をつけたものは、漢字音表記専用の原字でのみ弁別されている子音である：

閉鎖音	p	t		k
	p^h			k^h
破擦音		(ts)	tʃ	
		(ts^h)	$tʃ^h$	
摩擦音	(v)	s	ʃ	
			(ʒ)	
鼻音	m	n		(ŋ)
流音		l		
半母音		j		

4　韻母

4.1　総論

契丹小字で表記された漢字音では、入声韻尾が消滅しつつある状態であったと考えられ、また精組、知・照組の声母のもとで起こった韻母のｉ ＞ ï の変化が観察できることから、中世漢語音に近い状態であったと考える。したがって、中世漢語音の枠組みを基準にして契丹小字と漢字音の対応を考える。

漢字音の韻母は、母音だけではなく子音の末音を伴うものがあり複雑である。また、韻母の表記に用いられる原字には音節文字が多いために、韻母の表記を詳細に分析することは困難であるため､本論文では主母音の対立を中心に分析する。具体的には、韻母の表記に用いられる原字の分布から、中世漢語音やパスパ漢字音を参考にして音価を推定し、原字の使い分けがどのような対立を反映したものであるか分析することで、漢字音の表記に現れる母音の弁別を推定することを目指す。

中古音から中世漢語音への変化によって、主母音の区別は中古音と比べ単純なものとなっている。以下に、再構される中世漢語音の韻母を示す。韻尾と主母音との結合には制限があり、すべての母音が全ての韻尾と結びつくわけではない：

-Ø 韻尾

a	ia	ua
u	iu	
ɔ	iɔ	uɔ

-i 韻尾

ai	iai	uai
ei	i	ui
ï		

-ɛ 韻尾

iɛ	iuɛ

-u 韻尾

ɑu	au	iau
əu	iəu	

-m 韻尾

əm　iəm

am　iam

iɛm

-ŋ 韻尾

uŋ　iuŋ

aŋ　iaŋ　uaŋ

əŋ　iəŋ　uəŋ　iuəŋ

-n 韻尾

ən　iən　uən　iuən

an　ian　uan

uɔn

iɛn　iuɛn

2.3 で触れたように、契丹小字で表記された漢字音では平声、上声、去声の声調の違いは表記されていないので、平声、上声、去声の声調の違いは捨象する。

韻母体系を分析する前に、介音の扱い、および韻尾についてまとめておきたい。

介音の扱い

契丹小字で表記された漢字音では、

郎＜laŋ/laŋ＞	𘰾𘱃	l-ɑŋ	(Ø 介音)
相＜siaŋ/sjaŋ＞	𘱰𘲒	s-iɑŋ	(i 介音)
光＜kuaŋ/kwaŋ＞	𘲆𘳿	k-uɑŋ	(u 介音)

のように介音の有無・種類によって異なる文字が用いられており、介音は区別して表記されている。しかし、中世漢語音の介音の扱いどおりに表記されていないことがある。

そり舌音の声母や j-と結合した韻母では、介音 i が表示されないことがある。たとえば、-əu 韻と-iəu 韻の表記を見てみると、

-əu 韻	婁＜ləu/ləu＞	ᡵᡤ	l-ou
-iəu 韻	留＜liəu/liw＞	ᡵᡥ	l-iou
	守＜ʂiəu/ʂiw＞	ᡧᡤ	ʃ-ou
	右＜iəu/ŋiw＞	ᡳᡤᡠ	i,j-ou-u

のように、ᡤ は、-əu 韻のほか、そり舌音の声母や j-と結合した-iəu 韻の表記に用いられる。一方、ᡥ はそれ以外の声母と結合した-iəu 韻の表記に用いられる。これは、介音 i が、そり舌音や j-の声母によって吸収されたためであると考えられる。したがって、介音 i を持つ韻母がそり舌音の声母や j-と結合した場合には、介音を持たない直音韻母と同じ扱いになることがあったと考える。

また、唇音の声母と結合した場合には、介音 u が表示されないことがある。たとえば、-i 韻と、-ui 韻の表記を見てみると、

-i 韻	西＜si/si＞	ᡧᡳ	s-i
-ui 韻	貴＜kui/kuě＞	ᡴᡠ	k-uei
	妃＜fui/fi＞	ᡶᡳ	p^h,f-i

のように、ᡳ は-i 韻や唇音の声母と結合した-ui 韻の表記に用いられ、ᡠ は唇音ではない声母と結合した-ui 韻の表記に用いられる。これは、介音 u が唇音の声母に吸収されたためであると考えられる。「妃」の例ではパスパ漢字音では契丹小字の表記と同じく、介音は表示されていない。したがって、介音 u を持つ韻母では、唇音の声母と結合した場合には、介音を持たない直音韻母と同じ扱いになることがあったと考える。

韻尾の種類

韻尾の-m、-n、-ŋ は、基本的に中世漢語音と同じく区別されている。入声韻尾は、中世漢語音では他の陰声韻[31]に分類されており、当時すでに入声韻尾は消滅していたと考えられることがある。先行研究での入声韻尾の扱いについてまとめると、清格爾泰ほか(1985)では、原字の音価推定の際には主に中世漢語音をそのまま原字の推定音価としてあてはめており、入声韻尾は完全に消滅していると想定しているようである。愛新覚羅(2004:120)は、遅くとも契丹小字の創製時には、-p、-t、-k の-ʔへの変化が完了し、入声韻がすべて消失し陰声韻に合流する段階であったと言う。それに対して、呉(2007a)では、当時漢語中に入声韻尾が存在していたか、契丹人が使用した漢語借用語に入声の痕跡が残っているとする。このように入声韻尾に対する見解は分かれている。入声韻尾の状況がはっきりとしない状況では、原字の音価の推定や母音の対立について検討することは困難であると考えられるので、本論文では、入声韻尾は他の韻母とは別に分析し、契丹小字で表記された漢字音の入声韻尾がどのような状況であったのかを検討するに留める。

ここで､韻母体系あるいは母音体系に関する先行研究での記述をまとめておく。聶(1988)は、韻母に関しては一部の摂に関して言及するのみであるため、具体的な内容については実際の考察の際に言及する。愛新覚羅(2004:15)では、漢語の韻母に用いられる表音文字とそれが示す母音・音節を以下のようにまとめている。なお、□で囲われた原字は契丹語の語彙で用いられる表音文字だという：

単母音	複母音				母音＋鼻音			
𘬀 *a	𘬁 𘬂 *au	𘬃 *jau	𘬄 𘬅 *ia	𘬆 𘬇 *ai	𘬈 *an	𘬉 *am	𘬊 𘬋 *aŋ	𘬌 𘬍 *iaŋ
𘬎 *æ			𘬏 *iæ		𘬐 *æn	𘬑 *æm		
𘬒 *ə	𘬓 *əu				𘬔 *ən	𘬕 *əm	𘬖 *əŋ	
𘬗 𘬘 *o			𘬙 𘬚 𘬛 *io	𘬜 *oi	𘬝 *on		𘬞 *oŋ	
𘬟 𘬠 𘬡 𘬢 *u			𘬣 𘬤 *iu	𘬥 *ui	𘬦 *un		𘬧 *uŋ	𘬨 *iuŋ
𘬩 𘬪 *i (𘬫 *ï)					𘬬 *in		𘬭 *iŋ	

[31] 韻尾が母音あるいは Ø の韻母のこと。

4.2　各論

はじめに対音例を中世漢語音の韻ごとにまとめて示す。表では中世漢語音の韻を介音の種類 Ø、i、u、iu の順に配している。表の項目は順に、表記された漢字、漢字音の推定音価、対応する契丹小字、契丹小字の推定音価である。

声母の場合と同様に、対音例において、漢字に附されている「?」は、契丹文字と漢字との対応に疑いがあることを意味し、契丹小字に附されている「?」は、漢字との対音に関しては問題ないが契丹小字の誤写が疑われることを示している。

なお、同一の漢字の対音例が複数ある場合は、使用される文字が異なる場合を除き 1 度だけ記載している。実際に出現している総数や用例に関しては参考資料を参照されたい。

はじめに閉音節である-m、-n、-ŋ 韻尾を扱い、その後開音節である-Ø、-i、-u、-ɛ 韻尾を扱う。最後に入声韻尾を検討する。

4.2.1 -m 韻尾

表 15

-iəm	品＜phiən/p'im＞	ᡯ ᡘ	p^h-m
	沈＜şiəm/şim＞	ᡭ ᡦ	ʃ-ən
	金＜kiəm/kim＞	ᡬ ᡘ	k-m
-iɛm	点＜tiɛm/dɛm＞	ᡮ ᡱ	t,t^h-em
		ᡩ ᡙ ᡱ	t,t^h-ie-em
		ᡮ ᡱ ?	t,t^h-tʃur
	検＜kiɛm/kɛm＞	ᡬ ᡮ ?	k-?
		ᡬ ᡙ ᡱ	k-ie-em
		ᡬ ᡱ	k-em
	兼＜kiɛm/kjɛm＞	ᡬ ᡙ ᡱ	k-ie-em
-am	三＜sam/sam＞	ᡧ ᡫ ᡰ	s-a-am
	男＜nam/nam＞	ᡫ ᡰ	na-am
-iam	監＜kiam/kjam＞	ᡬ ᡳ ᡱ	k-ia-em
		ᡬ ᡳ ᡰ	k-ia-am

中世漢語音には、-əm、-iəm、-iɛm、-am、-iam の区別がある。今回調査した中には-əm 韻の例はなかった。

「点」ᡮ ᡲ、「検」ᡬ ᡮ は、字形の類似によるᡮ ᡱ 、ᡬ ᡱ の誤写であると考えられる。

「品」は『中原音韻』では真文韻-iən に分類されているが、中古音では phǐěm、パスパ漢字音では p'im であり、-m 韻尾である。韻母の表記に用いられるᡘ は声母の m-を記す文字であるため、契丹小字に反映される漢字音は中世漢語音よりも古い状態を保っていたと考えられる。したがって、-iəm 韻に分類した。

「沈」ᡭ ᡦ では、中世漢語音は-m 韻尾であるが、契丹小字の表記では-n 韻尾である。しかし、このような鼻音韻尾が中世漢語音と異なっている例は、調査した範囲ではこの 1 例であり例外的である。

-iəm 韻は、パスパ漢字音のように-im に近いものであったと考えられる。表記に用いられる、ᡯ 、ᡬ 、ᡘ は結合する母音に制限があるようには見えないことから、母音を伴っていない子音文字であると考えられる。-iəm 韻の表記では、母音は文字上では記されていないが、発音時には母音 i が補われて読まれたと考えた

い。

-iɛm 韻は、𗴲 、𗵆𗴲 で表記される。「天」＜thiɛn/t'ɛn＞𗹦𗵆𗾞 などの例から、介音は𗵆 によって表記されていると考えられる。「点」と「検」の韻母は、中世漢語音では介音 i があるが、パスパ漢字音では介音は表示されていない[32]。これらの漢字の契丹小字による表記には揺れが見られ、資料によって表記が異なる。耶律仁先墓誌(1072 年)などでは、「点」𗹦𗵆𗴲 、「検」𘝞𗵆𗴲 と表記され𗵆 によって介音を表しているのに対して、宋魏国妃墓誌銘(1110 年)などでは「点」𗴴𗴲 、「検」𘝞𗴲 と表記され介音が表示されない。蕭仲恭墓誌(1150 年)では、「点」𗴴𗴲 は介音を表示しないが、「検」𘝞𗵆𗴲 では表示する。これらの表記の揺れは、漢字音の発音に 2 種類あったためであると考えたい。なお、パスパ文字で介音が表示されている「兼」は、契丹小字で表記された漢字音では、資料に関係なく介音が表示されている。中世漢語音には、直音の-ɛm 韻はないが、𗴲 が ɛm を表示したと考えるのは妥当であると思われる。

-am 韻は、𗼇𗿋 、𗿋 によって表記される。𗼇 は a を表示していたと考えられるので(4.2.4.1 を参照)、𗿋 が am を表示していたと考えるのは妥当と思われる。

-iam 韻は、𗿊𗴲 、𗿊𗿋 で表記される。𗿊 が介音を表示していると考えられる。「監」𘝞𗿊𗴲 ~𘝞𗿊𗿋 の表記の揺れは介音によって主母音の開口度が狭まめられたことによるものであろう。

契丹小字によるこれらの韻母の表記であるが、基本的にすべての韻が書き分けられているといえる。𗹡 、𗿋 、𗴲 の使い分けが、im、am、ɛm が弁別的であったことを示している。

以上より、契丹語には i、a、ɛ の音が独立して存在していたと考える。

[32] パスパ漢字音では、これらの例だけではなく、多くの韻で中世漢語音でみられる介音が表示されていないことがある。理由ははっきりとは分かっていない。

4.2.2 -n 韻尾

中世漢語音には、-ən、-iən、-uən、-iuən、-an、-ian、-uan、-uɔn、-iɛn、-iuɛn の区別がある。今回調査した中には-uan、-ən の例はなかった。

-n 韻尾は例が多いため主母音の違いによって、ə 類(-iən、-uən、-iuən)、ɛ 類(-iɛn、-iuɛn)、その他(-an、-ian、-uɔn)、の 3 つに分けて検討する。

ə 類(-iən、-uən、-iuən)

表 16

-iən	賓＜piən/pin＞	𗦳𗗙？	ɑn-in	臣＜tʂhiən/ʐin＞	𗥃𗗙	tʃ,tʃʰ-in
	愍＜miən/min＞	𗅁𗗙	m-in		𗥃𗍫	tʃ,tʃʰ-ən
	進＜tsiən/tsin＞	𗍷𗗙	ts-in		𗍫𗗙？	?-in
	晉＜tsiən/tsin＞	𗍷𗗙	ts-in	仁＜ʈiən/rin＞	𗂧𗗙	ʐ-in
	秦＜tshiən/dzin＞	𗍷𗗙	s-in	斤＜kiən/kin＞	𗅇𗗙	k-in
	鎮＜tʂiən/tʂin＞	𗌭𗗙	tʃ-in	銀＜iən/ŋin＞	𗏵𗗙	ŋ-in
	陳＜tʂhiən/dzin＞	𗥃𗗙	tʃ,tʃʰ-in			
-uən	本＜puən/pun＞	𗴂𗍫	p-ən	敦＜tuən/tun＞	𗍉𗟲	t,tʰ-un
	門＜muən/mun＞	𗅁𗍫	m-ən	混＜huən/ɣun＞	𗗚𗟲	ɣ,γ-un
	文＜vuən/ʊun＞	𗣼𗟲	v-un			
-iuən	春＜tʂhiuən/tʂ'yn＞	𗥃𗗇	tʃ,tʃʰ-iun	郡＜kiuən/gyn＞	𗅇𗗇	k-iun
	軍＜kiuən/kyn＞	𗅇𗗇	k-iun		𗅇𗂧𗗇	k-iu-iun
		𗧓𗦇？	ʃ-iun,un	雲＜iuən/ɦwin＞	𗗇	iun

-iən 韻は、パスパ漢字音のように-in に近いものであったと考えられる。基本的に、韻母は𗗙 で記されている。したがって、𗗙 は in を表示していたと考える。例外としては、「臣」𗥃𗍫 がある。「臣」の表記は資料によって異なる。耶律仁先墓誌(1072 年)では、すべての例で𗥃𗍫 と表記されているのに対して、許王墓誌(1109 年)ではすべての例が𗥃𗗙 で表記されている。後述するように、𗍫 は ən を表示したと考えられる。そり舌音の声母によって母音が中舌化したために、𗗙 と𗍫 のどちらでも表記され得たのであろう。

-uən 韻は、パスパ漢字音のように-un に近いものであったと考えられる。-uən 韻は𗟲 および𗍫 で記される。「本」𗴂𗍫 および「門」𗅁𗍫 は、声母がともに唇音の声母であることから、介音 u が声母に吸収されたために他の-uən 韻と異なった原

字で表記されたと考える。したがって、調査した範囲では直音の-ən 韻の例はないが、𗍫 は ən を表示していると考えたい。また、𗍬 は un を表示していたと考える。

-iuən 韻は𗍭 で表記される。そり舌音の声母と結合している「春」は𗍪𗍭 と記され、介音の吸収はみられない。これは、パスパ漢字音のように-iuən 韻と-uən 韻の違いが主母音によるものであったためだと考えたい。したがって、𗍬 と𗍭 の区別は表示する主母音の音色によるものであり、𗍭 は yn を表示していたと考える。

ɛ 類(-iɛn、-iuɛn)

表 17

-iɛn	天＜thiɛn/t'ɛn＞ 𗈪𗌭𗎭	t,t^{h}-ie-en	練＜liɛn/lɛn＞ 𗍁𗌭𗎭	l-ie-en
	殿＜tiɛn/dɛn＞ 𗈪𗌭𗎭	t,t^{h}-ie-en	乾＜khiɛn/gɛn＞ 𗍮𗎭	x,k^{h}-en
	𗈫𗌭𗎭	t,t^{h}-ie-en	県＜hiɛn/ɣyɛn＞ 𗍮𗎭	x,k^{h}-en
	仙＜siɛn/sjɛn＞ 𗈬𗌭𗎭	s-ie-en	賢＜hiɛn/ɣjɛn＞ 𗍯𗌭𗎭	x,k^{h}-ie-en
	先＜siɛn/sjɛn＞ 𗈬𗌭𗎭	s-ie-en	延＜iɛn/jɛn＞ 𗍰𗌭𗎭	i,j-ie-en
	千＜tshiɛn/ts'jɛn＞𗈬𗌭𗎭	s-ie-en	𗍧𗍫	ue-ən
	前＜tshiɛn/dzɛn＞𗈬𗌭𗎭	s-ie-en		
-iuɛn	宣＜siuɛn/syɛn＞𗈬𗍧𗍮	s-ue-en	元＜iuɛn/ɦyɛn＞ 𗍬𗍧𗎭	ŋ-ue-en
	権＜khiuɛn/gyɛn＞𗍲𗍧𗍮	k-ue-en	𗍬𗍧𗍮	ŋ-ue-en
	玄＜hiuɛn/ɣjɛn＞𗍮𗎭	x,k^{h}-en	𗍬𗍧𗍭	ŋ-ue-n
	遠＜iuɛn/ɦyɛn＞ 𗍧𗎭	ue-en	院＜iuɛn/ɦyɛn＞ 𗍧𗎭	ue-en
	遠?＜iuɛn/ɦyɛn＞𗍲𗍬	ju-uɑn,ur	𗍩𗍭	ue-n

𗍩 は漢字音の表記では「院」𗍩𗍭 でのみ現れる文字であるため、詳しいことはわからない。

-iɛn 韻は、基本的に𗌭𗎭 で表記される。𗍧 は主に-iuɛn 韻に用いられる文字であり、𗌭 とははっきり区別されるものなので、「延」𗍧𗍫 は例外である。「玄」は-iuɛn 韻に属するが、契丹小字による表記は-iɛn 韻の「乾」、「県」と同じく𗍮𗎭 となる。これは、「玄」の韻母がパスパ漢字音 ɣjɛn のように-iɛn 韻に近かったことによると考えたい。また、「乾」、「県」、「玄」𗍮𗎭 の表記には、介音に相当すると考えられる𗌭 が用いられないが、これは声母を記す𗍮 が介音に相当する母音を含んでいたことによると考える。したがって、𗍮 は k^{h}i を表示していたと考える。中世漢語音には直音の-ɛn 韻はないが、𗎭 が ɛn を表示していたと考えるのは妥当であると

思われる。

-iuɛn 韻の表記には𗼇𗹦 ~𗼇𗼈 ~𗼇𗴼 の揺れが見られる。𗴼 は n-声母に用いられ、結合する母音に制限は見られないことから、母音を伴った文字ではないと考えられる。𗼈 は-iuɛn 韻の表記に用いられ、-iɛn 韻の表記には用いられないことから、𗹦 と𗼈 の区別は表示する主母音の違いによるものであり、𗼈 は œn、𗼇 は œ を表示していたと考えたい。

その他(-an、-ian、-uɔn)

表 18

-an	散＜san/san＞	𘓱𗱠𗾞	s-ɑ-ɑn	山＜ʂan/ʂan＞	𘖚𗱠𗾞	ʃ-ɑ-ɑn
	蘭＜lan/lan＞	𗿼𗱠𗾞	l-ɑ-ɑn	韓＜han/ɣan＞	𗯭𗾞	ɣɑ-ɑn
		𗿼𗱠𗾟	l-ɑ-ɑn	安＜an/ʔan＞	𗱠𗾞	ɑ-ɑn
-ian	燕＜ian/ʔjɛn＞	𗀛𗥤𗹦	i,j-ie-en			
-uɔn	団＜thuɔn/dɔn＞	𗰗𗦳	t^ho-ɔn,on	観＜kuɔn/kɔn＞	𗦞𗼈	ko-n
	官＜kuɔn/kɔn＞	𗦞𗼈	ko-n		𗍫𗃅𗦳	k-o,uə-ɔn,on

-an 韻は𗱠𗾞 、𗾞 によって表記される。𗾞 は an を表示していたと考える。

-ian 韻「燕」は-iɛn 韻と同じように、𗥤𗹦 で表記される。しかし、他の韻では a と ɛ は区別されていることを考えると、「燕」の韻母はパスパ漢字音のように iɛn に近かったために、このように表記されたのであろう。

-uɔn 韻は、パスパ漢字音のように-ɔn に近いものであったと考えられる。「官」𗦞𗼈 および「観」𗦞𗼈 に用いられる𗼈 は、母音を伴っているようには考えられないことから、これらの例では𗦞 が主母音を表示していると考える。従って、𗦞 は kɔ を表示していたと考える。また、𗦳 は ɔn を表示していたと考える。

まとめ

以上の議論をまとめると、契丹小字で表記された漢字音では、中世漢語音-n 韻は、基本的に書き分けられているといえる。𗰜 、𗴲 、𗲟 、𗹦 、𗾞 、𗦳 、𗰴 、𗼈 の使い分けが、in、un、yn、ɛn、an、ɔn、ən、œn が弁別的であったことを示している。したがって、契丹語には i、u、y、ɛ、a、ɔ、ə、œ の音が独立して存在していたと考える。

4.2.3 -ŋ 韻尾

中世漢語音には、-uŋ、-iuŋ、-aŋ、-iaŋ、-uaŋ、-əŋ、-iəŋ、-uəŋ、-iuəŋ の区別がある。

-ŋ 韻尾は例が多いため、主母音の違いによって、u 類(-uŋ、-iuŋ)、a 類(-aŋ、-iaŋ、-uaŋ)、ə 類(-əŋ、-iəŋ、-uəŋ、-iuəŋ)の 3 つに分けて検討する。

u 類(-uŋ、-iuŋ)

表 19

-uŋ	鋒＜fuŋ/fuŋ＞	止 ㄐ	p^h,f-uŋ	宗＜tsuŋ/tsuŋ＞	仝 ㄐ	ts-uŋ
	通＜thuŋ/t'uŋ＞	今 ㄊ	t,t^h-uŋ		仝 ㄐ	s-uŋ
		今 ㄡ	t,t^h-uŋ		仝 ㄡ	s-uŋ
	統＜thuŋ/t'uŋ＞	劳 ㄡ	t^h-uŋ	農＜nuŋ/nuŋ＞	公 ㄖ ㄡ	n-u-uŋ
	同＜thuŋ/duŋ＞	劳 ㄡ	t^h-uŋ	工＜kuŋ/kuŋ＞	九 ㄡ	k-uŋ
		劳 ㄊ	t^h-uŋ	功＜kuŋ/kuŋ＞	九 ㄡ	k-uŋ
	宋＜suŋ/suŋ＞	仝 ㄛ	s-uŋ	公＜kuŋ/kuŋ＞	九 ㄡ	k-uŋ
		仝 ㄐ	s-uŋ		九 ㄊ	k-uŋ
				宮＜kuŋ/kyuŋ＞	九 丙 ㄡ	k-iou-uŋ
				空＜khuŋ/k'uŋ＞	爻 ㄊ	x,k^h-uŋ
-iuŋ	龍＜liuŋ/lyuŋ＞	丵 ㄦ	l-uŋ	充＜tʂhiuŋ/tʂuŋ＞	艿 ㄡ	$tʂ^h$u-uŋ
	中＜tʂiuŋ/tʂuŋ＞	子 ㄡ	tʃ-uŋ	崇＜tʂhiuŋ/dʐuŋ＞	冄 ㄐ	$tʂ^h$-uŋ
		子 ㄊ	tʃ-uŋ	用＜iuŋ/jyuŋ＞	丂 ㄖ ㄡ	i,j-u-uŋ
	忠＜tʂiuŋ/tʂuŋ＞	子 ㄡ	tʃ-uŋ			

-uŋ 韻は、ㄐ や ㄡ によって表記される。ㄛ が用いられるのは、「宋」仝 ㄛ の 1 例であるが、字形が ㄡ と似ていることから、ㄡ の異字、あるいは誤写かもしれない。「宮」九 丙 ㄡ は-uŋ 韻の他の漢字と異なり、パスパ漢字音では kyuŋ となる。「宮」は、中古音では kĭuŋ であり、介音 i を持つ。丙 は iu を表示したと考えられるので(4.2.4.3 を参照)、「宮」の介音 i はまだ消失していなかったと考えられる[33]。

-iuŋ 韻は、「龍」丵 ㄦ 以外は-uŋ 韻の表記と同じ原字が使用される。「龍」以外はそり舌音の声母と結合している。これらの表記は、介音 i がそり舌音の声母や j-

[33] 「宮」は中古音では東韻 3 等に属する。「宮」以外で東韻 3 等に属するものに、「充」「崇」「中」「忠」があるが、すべてそり舌音の声母と結合しているため介音は表示されていないと考えられる。

に吸収されたために、直音の-uŋ 韻と同じ扱いになったためであると考えられる。したがって、𑖌 は-iuŋ 韻に相当しており、yŋ を表示していたと考えたい。

𑖎 については先行研究で異なる意見が提出されている。長田(1991)では、𑖎 の多くが歯頭音声母と結合したものであることから、𑖎 は韻母が歯頭音声母によって狭められたものであるとし、𑖏 は/ung/＝[ʊŋ]、𑖎 は/yng/＝[uŋ,ɯŋ]を表示するという。愛新覚羅(2004)は、𑖎 が宕摂合口-uaŋ の表記に用いられる例があることから[34]、𑖏 よりも𑖎 は開口度が広いとし、oŋ の音価を与えている。

長田(1991)が指摘しているように、𑖒 と𑖑 など、𑖏 と𑖎 と似た対応を示す原字が他の韻でも見られるので(4.2.4.3 を参照)、𑖏 と𑖎 、𑖒 と𑖑 の区別は主母音の違いを反映したものであると考えるのは妥当であると思われる。したがって、𑖏 は uŋ、𑖎 は ɯŋ を表示していたと考える。

a 類(-aŋ、-iaŋ、-uaŋ)

表 20

-aŋ	唐＜thaŋ/daŋ＞	𑖖 𑖍	t^hɑ-ɑŋ	郎＜laŋ/laŋ＞	𑖗 𑖍	l-ɑŋ
	廊＜laŋ/laŋ＞	𑖗 𑖍	l-ɑŋ	行＜haŋ/ɣaŋ＞	𑖑 𑖘	h,hɑ-ɑŋ
-iaŋ	将＜tsiaŋ/tsjaŋ＞	𑖐 𑖙	s-iɑŋ	昌＜tʂhiaŋ/tʂ'aŋ＞	𑖓 𑖍	$tʂ^h$ɑ,ʂɑ-ɑŋ
		𑖐 𑖙	ts-iɑŋ	長＜tʂhiaŋ/dʐaŋ＞	𑖓 𑖍	$tʂ^h$ɑ,ʂɑ-ɑŋ
		𑖐 𑖚	ts-iɑŋ	尚＜tʂhiaŋ/ʐaŋ＞	𑖜 𑖍	tʃ,$tʃ^h$-ɑŋ
		𑖐 𑖛 ?	s-lu		𑖓 𑖍	$tʂ^h$ɑ,ʂɑ-ɑŋ
		𑖐 𑖘	s-iɑŋ	尚＜ʂiaŋ/ʐaŋ＞	𑖝 𑖍	ʃ-ɑŋ
	相＜siaŋ/sjaŋ＞	𑖐 𑖙	s-iɑŋ	上＜ʂiaŋ/ʐaŋ＞	𑖝 𑖍	ʃ-ɑŋ
	梁＜liaŋ/ljaŋ＞	𑖗 𑖘	l-iɑŋ	江＜kiaŋ/kjaŋ＞	𑖞 𑖍	k-ɑŋ
	彰＜tʂiaŋ/tʂaŋ＞	𑖔 𑖍	tʃ-ɑŋ			
	章＜tʂiaŋ/tʂaŋ＞	𑖔 𑖍	tʃ-ɑŋ			
-uaŋ	方＜fuaŋ/faŋ＞	𑖘 𑖟	p^h,f-uɑŋ	光＜kuaŋ/kwaŋ＞	𑖞 𑖟	k-uɑŋ
	訪＜fuaŋ/faŋ＞	𑖘 𑖟	p^h,f-uɑŋ	皇＜huaŋ/ɣɔŋ＞	𑖠	ɣuɑŋ
	防＜fuaŋ/vaŋ＞	𑖘 𑖟	p^h,f-uɑŋ	黄＜huaŋ/ɣɔŋ＞	𑖠	ɣuɑŋ
		𑖙 𑖟	fu,p^hu-uɑŋ	王＜uaŋ/ɦwaŋ＞	𑖟	uɑŋ
	廣＜kuaŋ/kwaŋ＞	𑖞 𑖟	k-uɑŋ			

[34] 筆者が今回調査した範囲では、宕摂合口-uaŋ を𑖎 で表記したものはなかった。

「将」𐲤𐲻は、字形の類似による𐲤𐲻の誤写であると考えられる。𐲱は「皇」の表意文字としてつくられたと考えられる。「黄」はその仮借であろう。

-aŋ 韻は𐲭、𐲯で表記される。𐲯が使用されるのは「行」𐲷𐲯の 1 例であるので、どのような区別があったかはわからないが、𐲭、𐲯はともに aŋ を表示していたと考えたい。

-iaŋ 韻の表記では、そり舌音の声母の漢字は、-aŋ 韻と同じく𐲭で表記されるが、それ以外の声母では𐲻で表記される。これはそり舌音の声母と結合した時には、介音 i が吸収され直音の-aŋ 韻と同じ扱いになったためであると考えられる。したがって、𐲻は iaŋ を表示していたと考える。「江」は例外的に、𐲭によって韻母が表記される。「江」は中古音では kɔŋ であり、介音 i はない。後に牙喉音の 2 等韻で起こった拗音化によって中世漢語音では kiaŋ に変化する。他の牙喉音の 2 等韻の文字では拗音化が起こっていたことが契丹小字の表記からもわかるが、「江」は例外的にまだ拗音化が起こっておらず、中世漢語音よりも古い状態であったのかもしれない。𐲯は əŋ 韻を検討する際に言及する。

-uaŋ 韻は𐲴で表記される。唇音の声母と結合している「訪」は𐲰𐲴と表記され、介音の吸収はみられない。これは、-aŋ 韻と-uaŋ 韻の違いが主母音の違いによるものであったためだと考えたい。したがって、𐲴と𐲭の区別は表示する主母音の音色によるものであり、𐲴は ɔŋ を表示していたと考える。また、𐲱は k^{h}ɔŋ を表示していたと考える。

ə 類(-əŋ、-iəŋ、-uəŋ、-iuəŋ)

表 21

-əŋ	省＜ʂəŋ/ʂəŋ＞	𗍫𗥃	ʃ-iɑŋ			
-iəŋ	兵＜piəŋ/piŋ＞	𗢏𗗙	p-iŋ	鄭＜tʂiəŋ/dʐiŋ＞	𗥤𗗙	tʂï-iŋ
	平＜phiəŋ/biŋ＞	𗥃𗗙	p^h,f-iŋ	承＜tʂhiəŋ/ʐiŋ＞	𗣼𗗙	tʃ,$tʃ^h$-iŋ
	静＜tsiəŋ/dziŋ＞	𗤶𗗙	ts-iŋ	丞＜tʂhiəŋ/ʐiŋ＞	𗣼𗦳	tʃ,$tʃ^h$-ŋ
	青＜tshiəŋ/ts'iŋ＞	𗤶𗗙	s-iŋ	経＜kiəŋ/kjiŋ＞	𗅇𗗙	k-iŋ
	清＜tshiəŋ/ts'iŋ＞	𗤶𗗙	s-iŋ	京＜kiəŋ/kiŋ＞	𗅇𗗙	k-iŋ
	陵＜liəŋ/liŋ＞	𗠇𗗙	l-iŋ	景＜kiəŋ/kiŋ＞	𗅇𗗙	k-iŋ
	領＜liəŋ/liŋ＞	𗠇𗗙	l-iŋ	耿?＜kiəŋ/kjiŋ＞	𗅇𗥃	k-iɑŋ
	令＜liəŋ/liŋ＞	𗠇𗗙	l-iŋ	卿＜khiəŋ/k'iŋ＞	𗐱𗗙	x,k^h-iŋ
	寧＜niəŋ/niŋ＞	𗢭𗍏𗗙	n-i-iŋ	慶＜khiəŋ/k'iŋ＞	𗐱𗗙	x,k^h-iŋ
		𗢭𗗙	n-iŋ	軽＜khiəŋ/k'jiŋ＞	𗐱𗗙	x,k^h-iŋ
	聖＜ʂiəŋ/ʂiŋ＞	𗍫𗗙	ʃ-iŋ	興＜hiəŋ/xjiŋ＞	𗐱𗍏𗗙	x,k^h-i-iŋ
		𗍫𗦳	ʃ-ŋ		𗐱𗗙	x,k^h-iŋ
	政＜tʂiəŋ/tʂiŋ＞	𗥤𗗙	tʂï-iŋ	応＜iəŋ/ʔiŋ＞	𗗙	iŋ
	正＜tʂiəŋ/tʂiŋ＞	𗥤𗗙	tʂï-iŋ			
-uəŋ	弘＜huəŋ/ɣuŋ＞	𗟲𗦳	xu-ŋ			
-iuəŋ	永＜iuəŋ/ɦyuŋ＞	𗁅𗦳	iu-ŋ			
		𗁅□	iu-?			

-əŋ 韻の例としては、「省」𗍫𗥃 がある。𗥃 は-əŋ 韻以外に、-iəŋ 韻の「耿」𗅇𗥃 で用いられる。「耿」𗅇𗥃 は、耶律弘用墓誌(1100 年)で現れる。これは、関連する漢文墓誌に記された「淑儀耿氏」との対応から解読された。しかし、『遼史』では、「淑儀耿氏」を「姜氏」と記している。-iəŋ 韻が𗥃 によって表記されるのはこの 1 例だけであるが、これは漢字の対応に問題があるのかもしれない。なお、「姜」は中世漢語音では、kiaŋ である。-əŋ 韻の「省」𗍫𗥃 に用いられることを考慮し、𗥃 は əŋ を表示していたと考えたい。

-iəŋ 韻は、パスパ漢字音のように-iŋ に近いものであったと考えられる。-iəŋ 韻は、基本的に𗗙 で表記される。𗗙 は iŋ を表示していたと考える。「聖」の表記は資料によって異なる。蕭太山和永清公主墓誌(1095 年)と故耶律氏銘石(1115 年)では、𗍫𗦳 と表記するが、耶律宗教墓誌(1053 年)、道宗皇帝哀冊(1101 年)、耶律弘用墓誌銘(1100 年)では𗍫𗗙 と表記する。同様に-iəŋ 韻が𗦳 で表記されるものとして、「丞」𗣼𗦳 (蕭仲恭墓誌 1150 年)がある。𗍫 、𗣼 は、声母の表記にも用いられ

る文字であるが、声母の用例からは母音は伴っていない子音文字であると考えられるので、「聖」𘖚𘘿 と「丞」𘘹𘘿 では母音は文字上は記されていないと考えられる。表記にはっきりとした年代による違いなどを認めることはできないため、これは撰者による表記の違いであると考える。

-uəŋ 韻、-iuəŋ 韻の例はともに𘘿 で表記されている。声母での用例からは𘘿 は、母音は伴っていない子音文字であると考えられる。「弘」𘖘𘘿 および「永」𘖙𘘿 の例は、𘖘 、𘖙 によって主母音が表示されているために、𘘿 で韻尾だけが表示されたのであろう。

まとめ

以上の議論より、𘘀 、𘘁 、𘘂 、𘘃 (𘘄)、𘘅 、𘘆 、𘘇 の使い分けが、それぞれ、uŋ、ɯŋ、yŋ、aŋ、ɔŋ、iŋ、əŋ が弁別的であったことを示している。したがって、契丹語には、u、y、ɯ、a、ɔ、i、ə の音が独立して存在していたと考える。

4.2.4 非鼻音(-Ø、-u、-i、-ɛ)韻尾

非鼻音韻尾には、-Ø、-u、-i、-ɛ がある。韻尾の種類ごとに検討するが、-ɛ 韻は例が少ないので、-Ø 韻とまとめて分析する。また、-u 韻および-iu 韻は、漢語音韻学では、

-u 韻　　介音 Ø　＋　主母音 u　＋　韻尾 Ø
-iu 韻　　介音 i　＋　主母音 u　＋　韻尾 Ø

のように分析され、-Ø 韻尾に分類される。しかし、契丹小字との対音を考える上では-u 韻尾と同時に検討するほうが都合がいいと考えられるので、本論文ではこれらは-u 韻尾に分類した。

4.2.4.1 -ɛ 韻尾、-Ø 韻尾

表 22

-iɛ	射＜iɛ/jɛ＞	丐 攴	j-ie
-ia	家＜kia/kja＞	九 犭	k-iɑ,iæ
	下＜hia/ɣja＞	不	h,hɑ
		不 犭	h,hɑ-iɑ,iæ
-ua	馬＜mua/ma＞	又 为	m-ɑ
-ɔ	哥＜kɔ/kɔ＞	九 夯	k-e
		九 岑	k-e
-uɔ	左＜tsuɔ/tsɔ＞	仝 反	s-o,uə
		伞 反	ts-o,uə
	和＜huɔ/ɣwɔ＞	夭	xuo

-iɛ 韻は「射」丐 攴 の例のみである。攴 は、介音＋韻尾の iɛ の表記の際によく用いられる。したがって、攴 は iɛ を表示していたと考える。

-ia 韻は、基本的に犭によって表記される。「家」、「下」はともに中古音では牙喉音の 2 等字である。犭は他の韻で介音＋主母音 ia の表記に用いられることから、この表記の違いは牙喉音の 2 等字の拗音化(「家」ka ＞ kia など)によるものと考えられる。「下」不 は例外的である。「下」の例はすべて「同中書門下平章事」の

ものであり、「下」𗴲 と記されるのは許王墓誌(1109 年)の 1 例だけであることから、これは誤写である可能性がある。したがって、𗴲 は k^h、𗵆 は ia を表示していたと考える。

-ua 韻の例としては「馬」の例があり、韻母は𗼇 で表記される。「馬」は唇音の声母であることから、介音 u が声母に吸収され、介音を持たない直音の-a 韻と同じ扱いであったと考えられる。「安」𗼇 𗹦 のように𗼇 が a を表記したと考えられる例もあることから、直音の-a 韻の例はないが、𗼇 が a を表示していると考えるのは妥当であると思われる。

-ɔ 韻の例としては、「哥」𘝞 𗾞 がある。𗾞 は「哥」以外に、「越」＜iuɛ/ɦyɛ＞𗥃 𗾞 の表記に用いられている。これらの対応から𗾞 の音価を推定することは困難であるが、ɔ ではなく ʌ など他の母音を表示していたと考えたい。

-uɔ 韻は、パスパ漢字音のように-ɔ に近いものであったと考えられる。表記に用いられる𗴢 は、観＜kuɔn/kɔn＞𘝞 𗴢 𗍫 の表記に用いられており、𗴢 が ɔ を表示していたと考えるのは妥当であると思われる。𗽻 は「和」の表記に用いられる。𗽻 は k^hɔ を表示していたと考える。

以上の議論より。𗥃 と𗵆 の使い分けが iɛ と ia が弁別的だったことを示している。また、𗼇 、𗾞 、𗴢 の使い分けが、a、ɔ、ʌ が弁別的であったことを示している。したがって、契丹語には、a、ɛ、ɔ、ʌ の音が独立して存在していたと考える。

4.2.4.2 -i 韻尾

表 23

-i	帝＜ti/ti＞	𘜶	ti	醴＜li/li＞	𗾆 𗵘	l-i
		𗰗 𗵘 𗵘	t,t^h-i-i	李＜li/li＞	𗾆 𗵘	l-i
		𘜶 ?		騎＜ki/gi＞	𘝦 𗥃 𗵘	k-ie-i
	祭＜tsi/tsi＞	𗰘 𗵘	ts-i		𘝦 𗵘 𗵘	k-i-i
	済＜tsi/tsi＞	𗰘 𗵘	ts-i		𘝦 𗰜	k-i
	斉＜tshi/dzi＞	𗱕	ts^hi		𗍫 𗰜	ol-i
		𗰘 𗵘	s-i	期＜khi/gi＞	𗿻 𗵘	k^h-i
		𗰘 𗵘 𗵘	s-i-i	儀＜i/ŋi＞	𗿿 𗵘	ŋ-i
	西＜si/si＞	𗰘 𗵘	s-i	宜＜i/ŋi＞	𗿿 𗵘	ŋ-i
	知＜tʂi/tʂi＞	𗽾	tʂï	義＜i/ŋi＞	𗿿 𗵘	ŋ-i
	持＜tʂhi/dzi̯＞	𗰜 𗵘	tʃ,$tʃ^h$-i	懿＜i/ʔi＞	𗿾 𗵘	i-i
	礼＜li/li＞	𗾆 𗵘	l-i		𗵘 𗵘	i-i

-ui	妃＜fui/fi＞	𗤓 𗥃	p^h,f-i	尉＜ui/ʔuě＞	𗥈	uei
	内＜nui/nuě＞	𗢭 𗥈	n-uei		𗥉	uei
	水＜ʂui/ʂuě＞	𗤴 𗥈	ʃ-uei		𗥉 𗥃	uei-i
		𗤴 𗥉	ʃ-uei	衛＜ui/ɦuě＞	𗥈	uei
	貴＜kui/kuě＞	𗤶 𗥈	k-uei		𗥉	uei
	圭＜kui/kyě＞	𗤶 𗥈	k-uei		𗥈 𗥃	uei-i
	徽＜hui/xyě＞	𗤵 𗥉	k^h,x-uei		𗥉 𗥃	uei-i
		𗤵 𗥃	k^h,x-i		𗥊 𗥃？	ŋ-i
	魏＜ui/ɦuě＞	𗥊 𗥉	ŋ-uei			
		𗥊 𗥉？	un-uei			
		𗥊 𗥉 𗥃	ŋ-uei-i			
-ai	大＜tai/daj＞	𗤸 𗥄	t-ɑi	台＜thai/t'aj＞	𗤹	tɑi, t^hɑi
		𗤺 𗥄	t-ɑi	太＜thai/t'aj＞	𗤹	tɑi, t^hɑi
		𗤸 𗥄 𗥃	t-ɑi-i	採＜tshai/ts'aj＞	𗤼 𗥄	s-ɑi
		𗤼 𗥄 𗥃	t,t^h-ɑi-i	開＜khai/k'aj＞	𗥅 𗥆	k^h-j
		𗤽 𗥄 𗥃	t,t^h-ɑi-i		𗥅 𗥄	k^h-ɑi
		𗤹	tɑi, t^hɑi		𗤶 𗥄	k-ɑi
	袋＜tai/daj＞	𗤼 𗥄 𗥃	t-ɑi-i, t^hɑi		𗤵 𗥄	k^h,x-ɑi
-uai	帥＜ʂuai/ʂu＞	𗤴 𗥀	ʃ-uei			

「衛」𗥊𗥃 は字形の類似による、𗥉𗥃 の誤写であると考えられる。

-i 韻は、基本的に𗥃 で表記される。𗥃 は i を表示していたと考える。「騎」𗤶𗥇𗥃 、𗤶𗥁 、𗤎𗥁 の表記は例外的である。𗤎 が漢字音の表記に用いられるのはこの 1 例である。また𗥁 も出現数が極めて少ないので詳しいことはよくわからない。ここでは、𗥁 は i を表示していたと考えたい。また、𗤹 、𗤷 、𗤻 、𗤾 は単独で漢字音を表記することから、それぞれ、𗤹 tai、𗤷 ti、𗤻 ts^hi、𗤾 tʃi を表示していたと考える。

-ui 韻は𗥉 、𗥈 で表記される。𗥈 と𗥉 の違いは、文字下部の点の有無である。原字のなかには、このように点のない原字と、点のつく原字(影子字)の組みがいくつかある。これらのなかには、使い分けられているものもあるが、漢字音との対応を見るかぎり、𗥈 と𗥉 の区別はないように思われる。𗥉 、𗥈 は ui を表示していたと考えたい。「妃」𗤓𗥃 は唇音の声母と結合していたために、介音 u が声母に吸収され、直音の-i 韻と同じ扱いになったことによる表記であろう。

-ai 韻は基本的に𗥄 で表記される。𗥄 は ai を表示していたと考える。「開」𗥅𗥆

は例外的である。𗼇 は母音を伴っており、k^ha を表示していたと考える。

-uai 韻は「帥」𘖵𘘔 の例のみである。𘘔 は他の韻で用いられた例がないので音価を推定するのは困難である。ここでは、暫定的に中世漢語音を参考にして uai を表示していたと考える。

表 24

-ï	賜＜siï/sɿ＞	𘜶	sï	使＜ʂï/ʂʅ＞	𘘘	is
	司＜siï/sɿ＞	𘜶	sï		𘘇	ʂï
	子＜tsï/tsɿ＞	𘜷 𘜘	ts-ï		𘖵 𘗠	ʃ-i
		𘜷 𘜓	s-ï		𘘇 𘜓	ʂï-ï
		𘜷 𘜓	ts-ï	事＜ʂï/dzɻ＞	𘘇 𘜘	ʂï-ï
	紫＜tsï/tsɿ＞	𘜷 𘜓	s-ï		𘘇	ʂï
		𘜷 𘜓	ts-ï		𘘇 𘜓	ʂï-ï
	刺＜tshï/ts'ɿ＞	𘜶	sï	侍＜ʂï/zɻ＞	𘘇 𘜘	ʂï-ï
		𘜷 𘜓	s-ï		𘘇	ʂï
	氏＜ʂï/zɻ＞	𘘇	ʂï		𘘇 𘜓	ʂï-ï
	師＜ʂï/ʂʅ＞	𘘇	ʂï		𘖵 𘗠	ʃ-i
	史＜ʂï/ʂʅ＞	𘘇	ʂï			

-ï 韻は、主に𘜓 などで表記され、主に𘗠 で表記される-i 韻とは、はっきりとした違いがみられる。これは、精組、知・照組の声母のもとで起こった韻母の i＞ɿ、ʅの変化によるものと思われ、この母音変化がすでに起こっていたことがわかる。吉池(2004ab)は、𘜘 、𘜓 、𘜶 、𘘇 の用例のほとんどが漢字音の表記に用いられていることや、契丹語の固有語に対応する母音にしては出現頻度が低すぎることを根拠に、これらが漢字音表記専用の文字であると推測している。吉如何(2007)の統計によると𘜘 と𘜓 の用例は合計で 51 あり、そのうち 45 例が合成字の最終要素として表れている。また、合成字の第一原字として使用された例はない。これらは、この文字が韻母の表記として使用されていることを示唆しており、吉池(2004ab)の指摘は妥当であると考えられる。したがって、契丹語には本来 ï はなく、-ï の表記にのみ使用される𘜘 、𘜓 、𘜶 、𘘇 は漢字音表記専用の文字と考える。「使」𘖵𘗠 、「侍」𘖵𘗠 の例は、ï が契丹語本来の音韻体系に適応した表記と考えられるが、全体から考えると非常に少ないといえる。契丹語には借用語の音韻としては ï が定着していたのかもしれない。「使」𘘘 に関しては 3.2.3 を参照されたい。し

たがって、𐲠 は ï、𐲢 は sï、𐲤 は ʃï~ʂï を表示していたと考える。

以上より、𐲥 、𐲣 、𐲦 (𐲧)の使い分けが、i、ai、ui が弁別的であったことを示している。したがって、契丹語には、i、a、u の音が独立して存在していたと考える。

4.2.4.3 -u 韻尾

表 25

-u	部＜pu/bu＞	𐲩 𐲦	p^h,f-u	武＜vu/ʊu＞	𐲫 𐲦	v-u
		𐲨 𐲦	p-u		𐲬	u
		𐲨 𐲪 𐲦	p-u,iu-u	都＜tu/tu＞	𐲭	tu
		𐲩 𐲪	p^h-u,iu	度＜tu/du＞	𐲭	tu
		𐲨 𐲪	p-u,iu		𐲮 𐲯 ?	t,t^h-g,gu
	夫＜fu/fu＞	𐲧	fu,p^hu		𐲮 𐲪	t,t^h-u,iu
	府＜fu/fu＞	𐲧	fu,p^hu	徒＜thu/du＞	𐲰	t^h
		𐲬	fu,p^hu	奴＜nu/nu＞	𐲱 𐲦	n-u
	父＜fu/fu＞	𐲧	fu,p^hu	祖＜tsu/tsu＞	𐲲 𐲬	s-u
	輔＜fu/vu＞	𐲧 𐲦	fu,p^hu-u		𐲳 𐲬	ts-u
	駙＜fu/vu＞	𐲬	fu,p^hu	楚＜tʂhu/tʂ'u＞	𐲴 𐲬	tʃ,$tʃ^h$-u
		𐲧	fu,p^hu	姑＜ku/ku＞	𐲵 𐲦	k-u
	傅＜fu/fu＞	𐲧 𐲦	fu,p^hu-u	戶＜hu/ɣu＞	𐲶 𐲪	xu-u,iu
		𐲧	fu,p^hu	虎＜hu/xu＞	𐲶	xu
	富＜fu/fuw＞	𐲧 𐲦	p^hu,fu	護＜hu/ɣu＞	𐲶 𐲪	xu-u,iu
	副＜fu/fuw＞	𐲧 𐲦	p^hu,fu-u	五＜u/u＞	𐲷 𐲦	ŋ-u
		𐲧	p^hu,fu	呉＜u/u＞	𐲷 𐲦	ŋ-u
		𐲬	p^hu,fu	吾＜u/u＞	𐲷 𐲦	ŋ-u
-iu	許＜hiu/xy＞	𐲺 𐲫	x,k^h-iu	諸＜tʂiu/tʂy＞	𐲻 𐲫	tʂï-iu
	魚＜iu/ɦy＞	𐲷 𐲦	ŋ-u	如?＜ɻiu/ry＞	𐲼 𐲫	?-iu
	御＜iu/ɦy＞	𐲷 𐲫	ŋ-iu	主＜tʂiu/tʂy＞	𐲽 𐲫	tʂï-iu
	署＜ʂiu/zy＞	𐲾 𐲫	ʃ-iu		𐲻 𐲫	tʂï-iu
	車＜kiu/ky＞	𐲵 𐲫	k-iu	枢＜tʂhiu/tʂ'y＞	𐲾 𐲫	ʃ-iu
	書＜ʂiu/ʂy＞	𐲾 𐲫	ʃ-iu			

-u 韻は、𐲦 、𐲬 、𐲪 などによって表記される。𐲧 、𐲬 、𐲭 、𐲰 、𐲶 など、単独で漢字音を表記する原字は、母音を伴った音節文字であると考えられる。それぞれ、𐲧 p^hu、𐲬 p^hu、𐲭 tu、𐲰 tu、𐲶 xu を表示していたと考える。「度」𐲮 𐲯 は字形

の類似による𗤶𗥃 の誤写であろう。𗥖 と𗥃 の文字が表示する母音は異なったものである可能性はあるが、漢字音との対応から推測することは困難である。今後の課題としたい。ここでは、𗥖 、𗥃 は u を表示していたと考える。また、𗤓 は主に歯頭音声母と結合しており、4.2.3 で扱った𗣼 と似た分布を示す。したがって、𗤓 は ɯ を表示していたと考えたい。

-iu 韻は𗥁 で表記される。そり舌音の声母と結合している「署」𗟱𗥁 などでも、𗥁 によって韻母が表記され、「魚」𗦳𗥖 の 1 例を除いて𗥖 で表記されることはなく、介音の吸収はみられない。これは、パスパ漢字音のように-u 韻と-iu 韻の違いが主母音によるものであったためだと考えたい。したがって、𗥁 と𗥖 などの-u 韻尾を表記する原字の区別は、表示する主母音の音色によるものであり、𗥁 は y を表示していたと考える。

表 26

-əu	后＜həu/ɣiw＞	𗥄	ɣou		
	后＜həu/ɣiw＞	𗥂	ɣou		
	婁＜ləu/ləu＞	𗥅𗣼	l-ou		
-iəu	酒＜tsiəu/tsiw＞	𗤓𗥇	s-iou	壽＜ʂiəu/ʐiw＞	𗟱𗣼𗥖 ʃ-ou-u
		𗤔𗥇	ts-iou	九＜kiəu/kiw＞	𗦳𗥇 k-iou
	修＜siəu/siw＞	𗤓𗥇	s-iou	宥＜iəu/ŋiw＞	𗥈𗥑 i,j-ɑu
	留＜liəu/liw＞	𗥅𗥇	l-iou	遊＜iəu/jiw＞	𗥈𗥇𗥖 i,j-iou-u
	州＜tʂiəu/tʂiw＞	𗤜𗣼	tʃ,tʃʰ-ou	右＜iəu/ŋiw＞	𗥈𗣼𗥖 i,j-ou-u
	守＜ʂiəu/ʂiw＞	𗟱𗣼	ʃ-ou	牛＜iəu/ŋiw＞	𗦳𗥇 ŋ-iou
-ɑu	保＜pɑu/paw＞	𗥋𗥖	p-u	曹＜tshɑu/dzaw＞	𗤓𗥑 s-ɑu
	道＜tɑu/daw＞	𗥃𗥖	tɑ-u	高＜kɑu/kaw＞	𗦳𗥑 k-ɑu
		𗥃𗥖？	u,iu-u	誥＜kɑu/kaw＞	𗦳𗥑 k-ɑu
	討＜thɑu/t’aw＞	𗟲	tʰɑu		
-iɑu	驃＜piau/bɛw＞	𗥋𗥍	p-iɑu	昭＜tʂiau/tʂɛw＞	𗤜𗥍 tʃ,tʃʰ-iɑu
	小＜siau/sjɛw＞	𗤓𗥍	s-iɑu	趙＜tʂiau/dʐɛw＞	𗤚𗥍 tʂi-iɑu
	遼＜liau/lɛw＞	𗥅𗥍	l-iɑu	朝＜tʂhiau/dʐɛw＞	𗤜𗥍 tʃ,tʃʰ-iɑu
	少＜ʂiau/ʂɛw＞	𗟱𗥍𗥖	ʃ-iɑu-u	校＜kau/kjaw＞	𗦳𗥍𗥖 k-iɑu-u
	招＜tʂiau/tʂɛw＞	𗥌	tʃɑu,tʂɑu		𗦳𗥍 k-iɑu

「后」𗥁 は字形の類似による、𗥄 の誤写と考えられる。𗟲 、𗥌 はそれぞれ、5、100 を意味する表意文字である。「招」𗥌 、「討」𗟲 はその仮借であろう。

-əu 韻は𗼇、-iəu 韻は𗼆や𗼇で表記される。-iəu 韻では、そり舌音の声母および j-では𗼇で、それ以外の声母では𗼆で表記されるといえる。そり舌音の声母および j-では、介音 i が声母によって吸収されたために、直音の-əu 韻と同じ扱いになったためであると考えられる。これらがどのような音を表示していたか推測するのは難しいが、𗼇は əu、𗼆は iu を表示していたと考えたい。𘝦は単独で漢字音を表記することから、音節文字であったと考えられる。𘝦は k^həu を表示していたと考える。

-au 韻は𗽁および𗾞で表記される。「道」𗼎𗾞は、𗼎は母音を伴っていたために、他と違った文字によって韻母が表記されたのであろう。したがって、𗼎は ta を表示していたと考える。母音を伴っていない子音字の𗗙と結合する例を考慮し、𗽁は au を表示していたと考える。聶(1988)は、遇摂、流摂、効摂、通摂、宕摂入声の表記には共通する文字が使われることが多いことから、これらの表記に用いられる原字に o の音価を与えている。しかし、明らかに流摂や効摂は区別されており、混同されているのは「宥」𗹦𗽁の 1 例だけである。また、「保」𗹭𗾞の表記は、唇音の声母と結合したことによって主母音が円唇的に発音されたことによると考えるのが妥当であろう。

-iau 韻は𗿋および𗿋𗾞で表記される。そり舌音の声母と結合している「趙」𗼏𗿋などでは、韻母は𗿋によって表記され、介音の吸収はみられない。これは、パスパ漢字音のように-au 韻と-iau 韻の違いが主母音によるものであったためだと考えたい。したがって、𗽁と𗿋の区別は表示する主母音の音色によるものであり、𗿋は ɛu を表示していたと考える。

以上より、𗼇、𗼆、𗽁、𗿋の使い分けが、əu、iu、au、ɛu が弁別的であったことを示している。したがって、契丹語には、ə、i、a、ɛ の音が独立して存在していたと考える。

4.2.5 入声韻尾

入声韻尾を検討する際には、入声韻尾がすでに消滅している中世漢語音・パスパ漢字音と、入声韻尾が残っている中古音の再構音・音韻地位の両方を示し比較する。音韻地位は順に、中古音声母、開口・合口の区別、等位、声調(平声、上声、去声、入声)、『広韻』での所属韻、所属する摂、を表している。

表 27

漢字	契丹小字	推定音価	中古音	中世漢語音/パスパ漢字音	音韻地位
僕	𗼇𗼈	p-u	buk	phu/bu	並合 1 入屋通
禄	𗼋𗼈 𗼌𗼈 𗼌	l-u lu-u lu	luk	lu/lu	来合 1 入屋通
睦	𗼍	mu	mĭuk	mu/ʊu	明合 3 入屋通
叔	𗼎𗼏 𗼎𗼏𗼑 𗼎𗼑	ʃ-ou ʃ-ou-iu ʃ-iu	ɕĭuk	ʂiu/ʂy	書合 3 入屋通
淑	𗼎𗼒𗼘	ʃ-iu-u	ʑĭuk	ʂiu/zy	禅合 3 入屋通
蜀	𗼎𗼓	ʃ-u	ʑĭwok	ʂiu/zy	禅合 3 入燭通
略	𗼋𗼕𗼘	l-iɑu-u	lĭak	liau/lɛw	来開 3 入藥宕
洛	𗼋𗼖𗼘	l-ɑu-u	lak	lɑu/law	来開 1 入鐸宕
博	𗼇𗼗	p-o,ɑk	pak	pɑu/paw	幫中 1 入鐸宕
客	𗼁𗼙	x,k^{h}-ɑi	khɐk	khiai/k'jaj	溪開 2 入陌梗
伯	𗼇𗼙	p-ɑi	pɐk	pai/paj	幫開 2 入陌梗
冊	𗼊𗼙 𗼊𗼚	tʃ,tʃ^{h}-ɑi tʃ,tʃ^{h}-ɑi	tʃhæk	tʂhai/tʂ'aj	初開 2 入麥梗
特	𗼀𗼆	t,t^{h}-i̯,j	dək	thei[35]/dəj	定開 1 入徳曾
徳	𗼉𗼆	t,t^{h}-i̯,j	tək	tei/təj	端開 1 入徳曾
得	𗼉𗼆	t,t^{h}-i̯,j	tək	tei/təj	端開 1 入徳曾

[35] 「特」は『中原音韻』に収録されていないが、中古音では韻母が同音である「徳」の中世漢語音が tei であることや、声母の歴史変化を考慮し、thei と推定した。

国	𐽆𐽼	k-uei	kuək	kui/kuě	見合 1 入徳曾
職	𐽘	tʂï	tɕǐək	tʂi[36]/tʂi	章開 3 入職曾
室	𐽅𐽽	ʃ-i	ɕǐĕt	ʂi/ʂi	書開 3 入質臻
漆	𐽓𐽽 𐽓𐽽	s-i ts-i	tshǐĕt	tshi/ts'i	清開 3 入質臻
密	𐽔𐽙 𐽔𐽽	m-rə m-i	mǐĕt	mui/muě	明開 3 入質臻
率	𐽅𐽖	ʃ-o,uə	ʃǐwĕt	ʂu[37]/ʂu	生合 3 入術臻
察	𐽇	tʂ^{h}ɑ,ʂɑ	tʃhæt	tʂha/tʂ'a	初開 2 入黠山
越	𐽚𐽛	ue-e	ɣǐwɐt	iuɛ/ɦyɛ	云合 3 入月山
節	𐽓𐽜 𐽓𐽜	s-ie ts-ie	tsiet	tsiɛ/tsjɛ	精開 4 入屑山
十	𐽅𐽙	ʃ-p	ʑǐĕp	ʂi/ʐi	禅開 3 入緝深

𐽑 の推定音価-ɑk は、劉ほか(1995)が、「博」との対音から推定したものである。

入声韻尾が表記されていると考えられるものには、「十」𐽅𐽙 (蕭太山和永清公主墓誌 l.25)がある。これは、人名「陳十」𐽓𐽇 𐽅𐽙 を表記したものであるが[38]、𐽙 は声母 p-の表記に用いられる文字であることから、𐽙 によって-p 入声を記したものと考えられる。

また、清格爾泰(2002)は、𐽔 の音価を rə と推測している。-t 入声はウイグル文字やソグド文字で記された資料では-r で写されていることから、𐽔 もそれらと同じく、弱化し-t から-r となった状態の入声韻尾を表記した可能性がある。

今回収集したデータをみると、一部陰声韻の表記に使われる文字で韻母が記されているものがあるが、入声韻尾でのみ出現する文字も多く見られる。ここで、入声韻尾が消滅して陰声韻と合流している中世漢語音によって分類し、入声韻母とその他の声調の韻母表記に用いられる原字を比べると以下のようになる：

---

[36] 「職」は『中原音韻』に収録されていないが、中古音が同音の「織」の中世漢語音が tʂi であることから、tʂi と推定した。

[37] 「率」は『中原音韻』に収録されていないが、中古音の韻母が同音である「朮」の中世漢語音が ʂu であることや、声母の歴史変化を考慮し、ʂu と推定した。

[38] 「陳十」の名前は「蕭太山和永清公主墓誌」と同時に出土した漢文墓誌「大遼永清公主墓誌」との対応からわかっている。袁ほか(2005)では、契丹文の𐽓𐽇 𐽅𐽙 を「陳十保」と読み、漢文に記されている「陳十」とは違いがみられると言う。

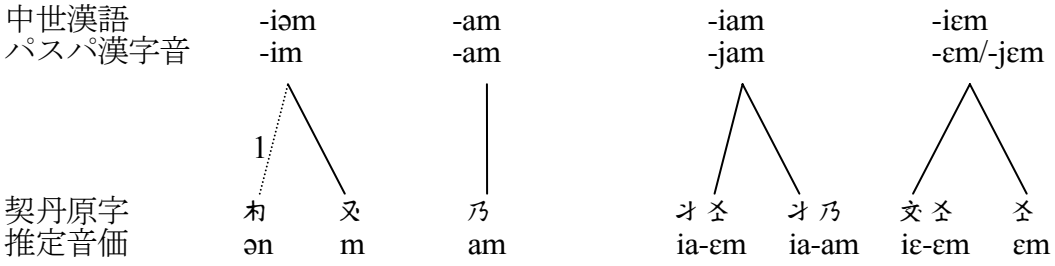
表 28

中世漢語音での韻母	入声韻の韻母表記	他の声調の韻母表記
-u 韻	𘖚、𘖜	𘖚、𘖝、𘖞
-iu 韻	𘖟、𘖟𘖠、𘖠、𘖡𘖚、𘖝 （そり舌音の声母と結合）	𘖢
-iau 韻	𘖣𘖚	𘖣、𘖣𘖚
-i 韻	𘖤、𘖥	𘖤、𘖤𘖤
-ai 韻	𘖦、𘖧	𘖨、𘖨𘖤
-ei 韻	𘖩	該当する韻なし
-ui 韻	𘖪 𘖫、𘖤（唇音の声母と結合）	𘖪、𘖬、𘖬𘖤
-iai 韻	𘖦	用例なし
-iɛ 韻	𘖭	𘖭
-iuɛ 韻	𘖮𘖯	用例なし

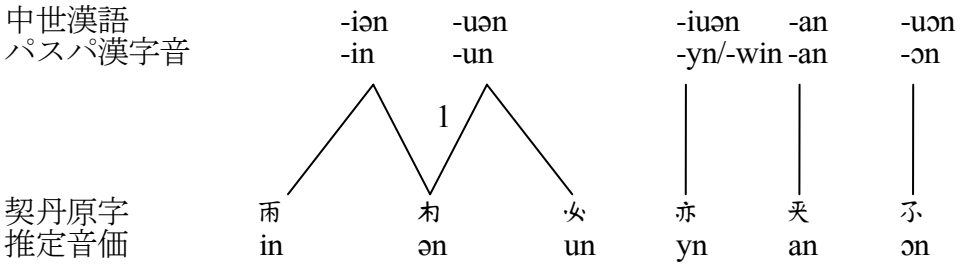
多くの韻で、相配する他の声調の表記とは異なる原字が使われている。したがって、契丹小字で表記される漢字音では、入声韻尾は陰声韻への合流した状態であるのではなく、呉(2007)が指摘するように入声韻尾の痕跡は残っていたと考えるのが妥当であると思われる。

4.3 小結

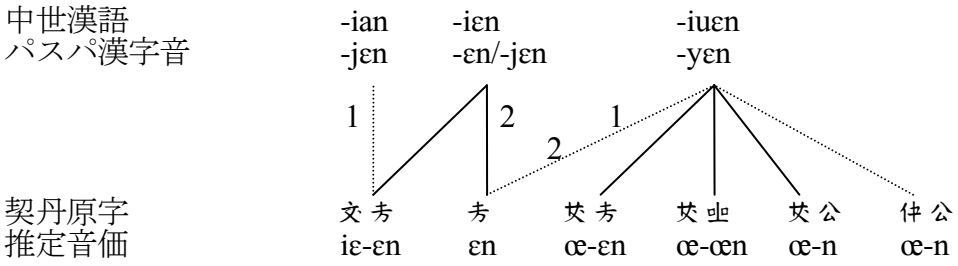
4.2 での議論を踏まえて、中世漢語音・パスパ漢字音と契丹原字との対応をまとめる。対応関係を図示するが、破線で示したものは例外的な対応であることを示している。また、原字の推定音価も示す。原字にいくつかの異字がある場合は、中心的と考えられる文字で代表させて記している。



1. 「沈」ᡭ ᠰ のみ

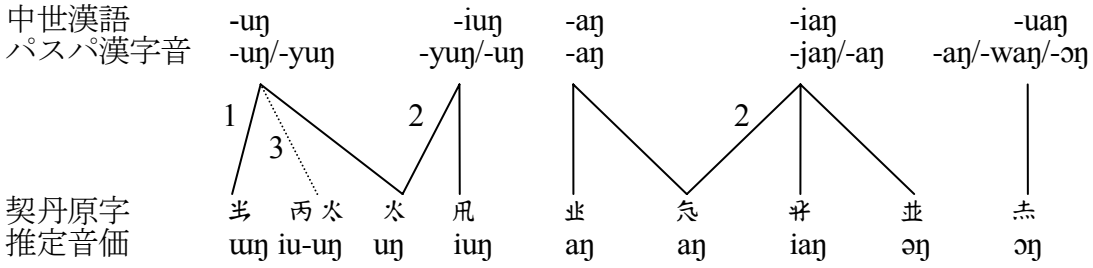


1. 唇音の声母と結合

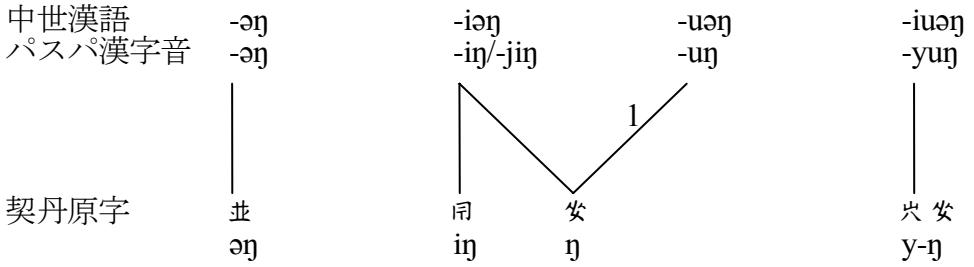


1. 1 例のみ

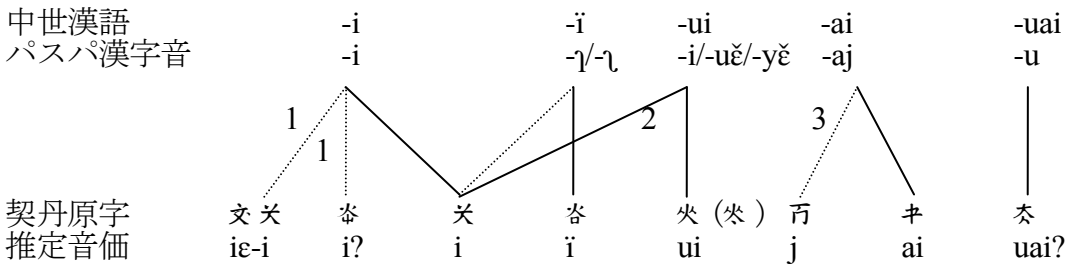
2. ᡮ k^hi と結合



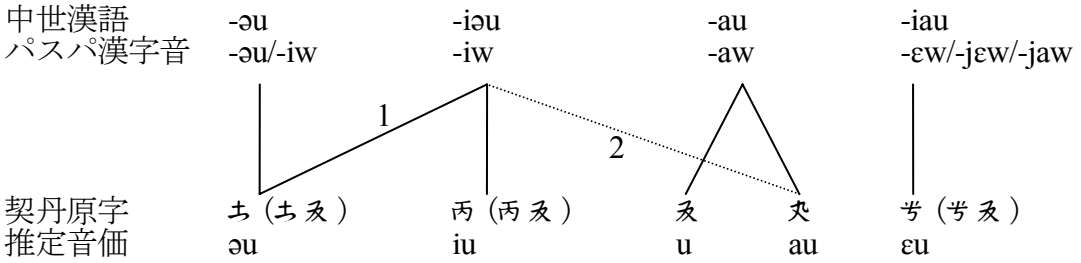
1. 主に ts-や s-と結合
2. そり舌音の声母および j-と結合
3. 「宮」𠑹 𠑺 𠑻 のみ



1. 「弘」𠑽 𠑿 の例のみ存在

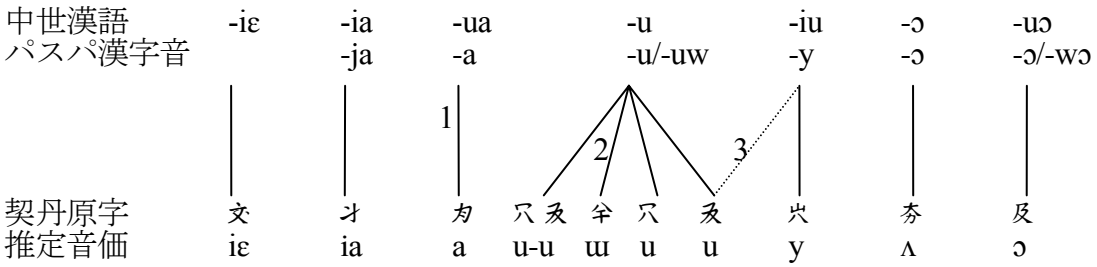


1. 「騎」のみ
2. 唇音の声母と結合
3. 「開」𠒁 𠒂 のみ



1. そり舌音の声母および j-と結合

2. 1 例のみ



1. 唇音の声母と結合

2. 主に ts-、s-と結合

3. 1 例のみ

以上より、漢字音の表記に用いられる契丹語の母音として観察される限り以下のものを認める。なお、括弧をつけたものは、漢字音表記専用の原字でのみ弁別されている母音である：

i y (ɨ) ɯ u

ə

ɛ œ ʌ ɔ

a

5　まとめ

5.1　契丹語の音韻体系

3 章、4 章で検討したことをもとに契丹語の音韻体系についてまとめる。

5.1.1 漢字音の表記には表れない音素

3 章で漢字音声母との対応から推定した子音以外に、先行研究で音価が推定された文字に r を含むものがある。清格爾泰(2002)では、𘓐 に ri の音価を与えている。𘓐 は十二支の午(馬)を表す𘓏𘓐 m-ri との対応から推定された。モンゴル文語では馬は mori であり、その他のモンゴル諸語でも r を含んだ音形式である[39]。また、契丹の官職名である「夷離堇」は𘓐𘓓𘓑 ri-k-ən と記される。白鳥(1911:1406)や Pelliot(1930:44)は夷離堇＜中世漢語音 i li kin＞をチュルク語やモンゴル語の erkin、irkin[40]と関連させている。原字の表示する母音の位置などに関しては問題があるが[41]、語の対応には問題がないと思われる。したがって、3 章で検討した母音以外に、契丹語に r の音を認める。

また、母音に関しては、清格爾泰ほか(1985:131-146)では𘓒 に[ʊ]の音価を与えている。この原字の音価推定は契丹語の動詞の母音調和から推定された。清格爾泰ほか(1985)は、契丹語の動詞語尾には 2 つの系統が見られるとし、それは動詞の語尾に母音調和が適用されたためであると推定している。そして、モンゴル語の母音調和からの類推によって、𘓒 を[ʊ]と推定する。しかしながら、𘓒 は漢字音の表記には用いらないために音価を検証することが不可能である。したがって、ここでは先行研究を指摘するにとどめる。𘓒 については今後の課題としたい。

---

[39] 孫主編(1990:487)はモンゴル諸語での「馬」に対応する形式として、mœr、morj、moriŋ、mørn、morə を挙げている。

[40] a title borne by tribal chiefs, inferior to *xağan* but superior to *beg* (Clauson 1972:225)

[41] 呉(2007b)は、原字は子音の前後に特定の母音を付加して読むことがあり、一つの文字が ir~ri のように VC あるいは CV のどちらも表音しうる可能性を指摘している。

5.1.2 契丹語の音韻体系

3 章、4 章および 5.1 の議論をまとめ、契丹語の音韻体系を以下のように推定する。なお、括弧をつけたものは、漢字音表記専用の原字でのみ弁別されている音であり、契丹語には本来なかったと考えられる音素である：

子音

閉鎖音	p	t		k
	p^h			k^h
破擦音		(ts)	tʃ	
		(ts^h)	$tʃ^h$	
摩擦音		s	ʃ	
	(v)		(ʒ)	
鼻音	m	n		(ŋ)
流音		l		
		r		
半母音		j		

母音

i y	(ï)	ɯ u	
	ə		
ɛ œ		ʌ ɔ	
	a		

5.2　原字の推定音価

3 章および 4 章の議論をもとに推定した原字の音価をここにまとめる。なお、表の「清」は清格爾泰(2002)による推定音価、「愛」は愛新覚羅(2004)による推定音価を示している。

字形	武内	清	愛	字形	武内	清	愛
𑨀	p	p	bo/b	𑨚	u	u	u
𑨁	p	p	bu	𑨛	u	u,iu	u
𑨂	p^h	p^h,f	p/b	𑨜	y	iu	iu
𑨃	v	v	v	𑨝	œ	ue	jo
𑨄	m	m	m	𑨞	ʌ	e	ə
𑨅	t	t,t^h	d/t	𑨟	ʌ	e	ə
𑨆	t	t,t^h	d/t	𑨠	ɯ	u	u/o
𑨇	ts	ts	s/sə	𑨡	ɯ	mu	mu
𑨈	s	s	s/sə	𑨢	ï	ï	ï
𑨉	n	n	n/ən	𑨣	ï	ï	ï
𑨊	l	l	l	𑨤	iɛ	ie	iæ
𑨋	$tʃ^h$	tʃ,$tʃ^h$	tʃ/dʒ	𑨥	ia	iɑ,iæ	ja
𑨌	ʃ	ʃ	ʃ	𑨦	iu	iou	io
𑨍	ʒ	z̡	ʒ/j	𑨧	ɛu	iɑu	jau
𑨎	k	k	g	𑨨	ai	ɑi	ai
𑨏	k^h	x,k^h	x/k	𑨩	au	ɑu	au
𑨐	k^h	h,hɑ	xia	𑨪	ui	uei	ui
𑨑	ŋ	ŋ	əŋ/ŋ	𑨫	ui	uei	ui
𑨒	j	i,j	i	𑨬	əu	ou	əu
𑨓	i	i	i	𑨭	p^hu	fu,p^hu	pu
𑨔	i	i	i/ɤi	𑨮	p^hu	fu,p^hu	pu
𑨕	i	i	i	𑨯	na	nɑ	na
𑨖	a	ɑ	a	𑨰	lu	lu	lu
𑨗	ɔ	o,uə	o	𑨱	ti	ti	di

字形	武内	清	愛	字形	武内	清	愛
尺	ta	tɑ	da	丞	ɛm	em	æm
六	ta	t	da	寿	ɛn	en	æn
久	ta	t	da	乃	am	ɑm	am
仍	ta	t^hɑ	t/tu	天	an	ɑn	an
生	tɔ	t^ho	to	奏	an	ɑn	an
们	tu	tu	du	怎	aŋ	ɑŋ	aŋ
劣	tu	t^h		业	aŋ	ɑŋ	aŋ
丐	ts^hi	ts^hi	tʃ	尒	ɔn	ɔn,on	on
丗	sï	sï	sə	杰	ɔŋ	uɑŋ	uaŋ
友	tʃi	tʂï	dʒi	火	un	un	un
友	tʃi	tʂï	dʒi/tʃi	太	uŋ	uŋ	uŋ
刘	tʃa	tʃ	dʒa	水	uŋ	uŋ	uŋ
子	tʃu	tʃ	s	冬	uŋ	uŋ	uŋ
帛	$tʃ^h$a	$tʂ^h$ɑ,ʂɑ	tʃa	亦	yn	iun	iun
妨	$tʃ^h$u	$tʂ^h$u	tʃu	爪	yŋ	uŋ	juŋ
丙	$tʃ^h$ɯ	$tʂ^h$	tʃau/tʃ	业	œn	en	æn
丞	ʃi	is	isu/is/-s	步	ɯŋ	uŋ	oŋ
允	ʃi~ʂï	ʂï	ʃi	朴	ən	ən	ən/-n
丗	kɔ	ko	go	並	əŋ	iɑŋ	jaŋ
丞	k^hi	x,k^h	qio	忿	tai	tɑi,t^hɑi	tai/dai
叔	k^ha	k^h	q/qa	无	tau	t^hɑu	tau/ta
丞	k^ha	xɑ	qa/qan	邪	tʃau	tʃɑu,tʂɑu	dʒau
夷	k^hɔ	xuo	xo	介	k^həu	ɣou	xəu
刘	k^hu	ɣ,γ	q	爿	iaŋ	iɑŋ	jaŋ
北	k^hu	xu	xu	朴	iaŋ		
雨	in	in	in	太	uai	uei	oi
闭	iŋ	iŋ	iŋ	主	k^hɔŋ	ɣuɑŋ	xuaŋ

5.3　契丹語の母音調和

本論文で推定した契丹語の音韻体系と原字の音価をもとに、契丹語に見られる「母音調和」について考えてみたい。清格爾泰ほか(1985)などでは、契丹語の名詞や動詞の形態変化に見られる原字の分布を、母音調和によって説明をしている。属格語尾や動詞語尾について議論されてきたが、動詞の表記に使用される原字の多くは漢字音の表記には表れないものであるため、ここでは名詞の属格語尾について考えてみたい。

5.3.1 先行研究

はじめに先行研究の記述をまとめる。

清格爾泰(2002)

清格爾泰(2002:11-12)では、属格語尾を以下のように分類している：

ɑ が主要母音である語には、𗼇 [ɑn]が用いられる。

i が主要母音である語には、𗼈 [in]が用いられる。

u が主要母音である語には、𗼉 [un]が用いられる。

ʊ~ɔ が主要母音である語には、𗼊 [ʊn]~[ɔn]が用いられる。

ə が主要母音である語には、𗼋 [ən]が用いられる。ə は中央の母音なので、調和の余地が比較的広く、主要母音が ə ではない語にも使われることがある。

𗼌 [nə]、[n]は格の付加成分になるが、使われることは稀である。

愛新覚羅(2004)

愛新覚羅(2004:123)では、-n 属格語尾を以下のように分類している：

𗼋　母音(i、u、ə、a)、止摂開口 3 等字、子音(n、ŋ、l、r)に接続

𗼉　狭い円唇母音、通摂合口字に接続

𗼇　母音 a、複母音(ai、ia)、宕摂開口字

𗼊　広い円唇母音、宕摂合口字

𗼌　用例は比較的少ない、主に母音 ə に接続

𗼍　用例は比較的少ない、主に母音 u、i に接続

𗼈　母音 i、個別にそのほかの母音に接続する場合がある

呉(2005)

呉(2005)は、契丹語の性・数・格を研究したものである。呉(2005:16-35)の-n 属格語尾に関する記述をまとめる：

契丹語のなかには、𗼇 [ɑn]、𗼈 [ən]、𗼉 [in]、𗼊 [ʊn]、𗼋 [un]、𗼌 [en]、𗼍 [yn]の 7 つの属格の付加成分がある。母音の性質によって付加成分が選択され、母音が ɑ 類なら𗼇 [ɑn]、i 類なら𗼉 [in]、ə 類なら𗼈 [ən]、u 類なら𗼋 [un]が用いられる。𗼊 [ʊn]と𗼌 [en]にも類似の規則がある。𗼈 [ən]は、頻度が高く広く適用される。

5.3.2 分析

契丹小字で表記された漢語借用語は、ふつう漢字一字を単位に分かち書きされ、属格語尾は最後の漢字音を表している小字に付加される。以下に例を示すが、□によって示した原字が属格語尾であると考えられている。ここで示す原字の推定音価は筆者の音価である：

𘐀𘓱	𘓵𘓶	𘓵𘓷𘐈	𘓸𘓹𘓺	𘓻𘓼	𘓽𘓾[42]	「尚書省の右丞相」
tʃʰa-aŋ	ʃ-y	ʃ-əŋ-ən	j-əu-u	tʃʰ-ŋ	s-iaŋ	
尚	書	省	右	丞	相	

(蕭仲恭墓誌 l.22)

𘓸𘓿𘓌	𘓶𘓀	𘓹𘓸𘓶	𘓺	𘓹𘓸𘓶	𘓸	「延慶宮の都宮使」
j-iɛ-ɛn	kʰ-iŋ	k-iu-uŋ-un	tu	k-iu-uŋ	ʂï	
延	慶	宮	都	宮	使	

(耶律奴墓誌銘 l.13)

[42] 「相」𘓽𘓾は、𘓽𘓿の誤写と考えられるので、ここでは便宜的に s-iaŋ の音価を与えている。

これらの漢語借用語に現れる属格語尾は、

丵 丐	𠂤 ふ	遼王の	伞 雨	𠂤 ふ	晋王の
l-ɛu	ɔŋ-ɔn		ts-in	ɔŋ-ɔn	
九 火	𠂤 ふ	国王の	伞 水	𠂤 ふ	宋王の
k-ui	ɔŋ-ɔn		s-uŋ	ɔŋ-ɔn	
𠂉 𡿨	𠂤 ふ	許王の	丙 文 夸	𠂤 ふ	燕王の
k^h-y	ɔŋ-ɔn		j-iɛ-ɛn	ɔŋ-ɔn	

などの例が示すように、属格語尾の付く漢字音に影響されており、それ以外の漢字音は語尾の選択に影響を与えていないと考えられる。したがって、ここで属格語尾の母音調和を検討する際には、語尾の付いている漢字音のみを抽出して分析することにする。

調査した範囲では、漢語借用語に付加された属格を表す原字として、雨 in、ふ ɔn、灬 un、木 ən の 4 つがあった。以下に、属格を表す原字のごとにどのような漢字音に付加されるかをまとめる。なお、表中の「出現個所」は参考資料での整理番号によって示している。

雨 in が付加される例

漢字	字形・推定音価	出現個所
帝	王 雨 ti-in	C9,C11,C42,E8,E9,F5,F14,G3,G4,I1,L14,L46,L48, N23,N25,N25,N31,N31,Q6
帝	王 雨[43] ?-in	N17
妃	𠂤 𠂢 雨 p^h-i-in	N1,N2,N19
師	𠂤 𠂢 雨 ʃ-i-in	O14

[43] 王 雨 は王 雨 の誤写と考えられる。

ふ ɔn が付加される例

漢字	字形・推定音価	出現個所
王	𠂤ふ ɔŋ-ɔn	A7,A1,A10,A21,A25,C13,C16,C18,C23,C36,C41, C48,C53,C60,C67,C71,C75,C79,C8,G1,G5,G18, H25,H30,L8,L44,O9,Q3,Q8,Q10,Q22
訪	𠚪𠂤ふ p^h-ɔŋ-ɔn	E10,H7
率	𠂉及ふ ʃ-ɔ-ɔn	G7,G8

𠂢 un が付加される例

漢字	字形・推定音価	出現個所
州	𠂤𠂇𠂢 $tʃ^h$-əu-un	A17,A22,B2,E14,E15,O2,R8,R13
鋒	𠚪𠂤𠂢 p^h-ɯŋ-un	C35
后	𠆢𠂢 k^həu-un	D1,D3,D10D14,H24
后	𠂆𠂢[44] k^h-un	D11
宗	𠇍𠂤𠂢 s-ɯŋ-un	E12
宗	𠇍𠂤𠂢 ts-ɯŋ-un	M16,O16
公	𠓛𠂊𠂢 k-uŋ-un	E6
主	𠂇𠂋𠂢 tʃ-y-un	F10,H27,N24,Q7,Q15
宮	𠓛丙𠂊𠂢 k-iu-uŋ-un	G11,L47,N28
祖	𠇍𠂍𠂢 ts-ɯ-un	M1,M4
府	𠆢𠂢 p^hu-un	Q25
部	𠀋𠂎𠂢 p-u-un	R17

[44] 𠂆𠂢 は𠆢𠂢 の誤写と考えられる。

𗍫 ən が付加される例

漢字	字形・推定音価	出現個所
帝	𘜶 𗍫 ti-ən	A5,D2,D6,D7,D13,I3,O10,O11,O12
帝	𗗠 𗅋 𗅋 𗍫 t-i-i-ən	H4
使	𗴲 𗅋 𗍫 ʃ-i-ən	A16
軍	𗢭 𗹦 𗍫 k-yn-ən	C14,C15,C19,F12,G12,H1,H6,O1
事	𗹏 𗍫 ʂï-ən	C26
県	𗦳 𗼇 𗍫 kʰi-ɛn-ən	C31
京	𗢭 𗏵 𗍫 k-iŋ-ən	C30,C38,C39,C43,C55,C76,E22,E23,E24,G15, H13,L2,L41,Q2,Q50
令	𗤓 𗏵 𗍫 l-iŋ-ən	C44
密	𗖵 𗌭 𗍫 m-rə-ən[45]	C45,K2
検	𗢭 𗖵 𗦟 𗍫 k-iɛ-ɛm-ən	C66
進	𗠇 𗍋 𗍫 ts-in-ən	E11
尉	𗅇 𗍫 ui-ən	F17
権	𗢭 𗚗 𗥃 𗍫 k-œ-œn-ən	F33
師	𗹏 𗍫 ʂï-ən	L49
清	𗠇 𗏵 𗍫 s-iŋ-ən	O19
唐	𗐯 𗵘 𗍫 ta-aŋ-ən	P3
州	𗍑 𗱕 𗍫 tʃʰ-əu-ən	P5
司	𗼻 𗍫 sï-ən	Q21
徽	𗵆 𗿋 𗍫 kʰ-ui-ən	Q26
徽	𗵆 𗅇 𗍫 kʰ-ui-ən	Q57
省	𗴲 𗼵 𗍫 ʃ-əŋ-ən	Q42,Q44
使	𗹏 𗎘 𗍫 ʂï-ï-ən	R4

[45] 𗌭 の音価は清格爾泰(2002)による。

これらを、漢字音の表記に用いられる原字の音価によって整理すると以下のようになる。なお、表では誤写と考えられるものは除外している：

母音終わりのもの

母音による分類	結合する属格語尾
主母音が i　　𘖵 ti、𘜶 𘜘 p^h-i、𘘚 𘜘 ʃ-i	𘖆 in
主母音が ɔ　　𘘚 𘘖 ʃ-ɔ	𘖃 ɔn
主母音が u　　𘜿 p^hu、𘜎 𘜑 p-u 主母音が y　　𘜙 𘜒 tʃ-y 主母音が ɯ　　𘜾 𘜿 ts-ɯ u で終わる二重母音　　𘜍 𘜓 tʃ^h-əu、𘜻 k^{h}əu、𘜾 𘜷 s-ɛu	𘜒 un
主母音が i　　𘖵 ti、𘘚 𘜘 ʃ-i、𘜽 𘜘 𘜘 t-i-i 主母音が ï　　𘜌 ʂï、𘜌 𘜕 ʂï-ï、𘜦 sï i で終わる二重母音　　𘜗 𘜒 k^h-ui、𘜗 𘜒 k^h-ui、𘜒 ui u で終わる二重母音　　𘜍 𘜓 tʃ^h-əu	𘜑 ən

子音終わりのもの

母音による分類	結合する属格語尾
𘜓 ɔŋ、𘜶 𘜓 p^h-ɔŋ	𘖃 ɔn
𘜄 𘜒 k-uŋ、𘜾 𘜷 s-ɯŋ、𘜾 𘜷 ts-ɯŋ、𘜶 𘜷 p^h-ɯŋ、𘜄 𘜇 𘜒 k-iu-uŋ	𘜒 un
𘜹 𘜔 l-iŋ 、𘜾 𘜔 s-iŋ 、𘜄 𘜔 k-iŋ 、𘜾 𘖆 ts-in 、𘜄 𘜞 𘜡 k-iɛ-ɛm 、𘜄 𘜞 𘜰 k-œ-œn、𘜄 𘜞 k-yn、𘜎 𘜰 ʃ-əŋ、𘜘 𘜛 m-rə、𘜰 𘜆 k^hiɛn、𘜋 𘜏 t^ha-aŋ	𘜑 ən

子音終わりの漢字音には、ほとんどの場合𘜑が付加されている。

先行研究では𘜑は広く適用されると言われているが、どのような母音に対しても付加されうるというわけではないようである。「帝」𘖵 𘜑 ti-ən ~ 𘖵 𘖆 ti-in の例のように、𘖆 が付加される漢字音には𘜑 が付加されることがある。𘖵 𘜑 と𘖵 𘖆 の分布を見てみると、道宗皇帝哀冊(1101 年)では𘖆 と𘜑 のどちらも現れる[46]。しかし、耶律宗教墓誌(1053 年)、仁懿皇后哀冊(1076 年)、耶律弘用墓誌(1100 年)、故耶律

[46] 冊蓋では𘖆 が用いられるが、本文では𘜑 が用いられている。

氏銘石(1115 年)では𘈩𘈪だけが用いられ、それ以外の資料では𘈩𘈫だけ用いられることから、資料による差が大きいと言える。

一方、𘈬やふが付加される漢字音には、𘈪が付加されることはほとんどないといえる。𘈪が付加されるものとして「州」𘈪𘈭(大金皇弟都統経略郎君行記 l.3)があるが、1 例のみであるので例外と考えるべきかもしれない。

以下に、観察される契丹語の属格語尾の概略をまとめる：

- 母音 ï で終わる漢字音や子音おわりの漢字音(-ŋ を除く)には𘈪が付加される。
- 母音 i で終わる漢字音には𘈫あるいは𘈪が付加される。
- 母音 ɔ や ɔŋ で終わる漢字音にはふが付加される。
- u、y、ɯ で終わる漢字音、あるいは uŋ、yŋ、ɯŋ で終わる漢字音に𘈬が付加される。

5.4　契丹小字で表記された漢字音の性質

2.3 で示したように、契丹小字で表記された漢字音では、漢語では区別されている音声が区別されずに表記されていることがあり、契丹語に取り入れられた漢字音はある程度契丹語の音韻体系に適応したものであると考えられる。

しかし、同じ漢字音であっても、監＜kiam/kjam＞𘈦𘈨𘈧~𘈦𘈨𘈣のように表記に揺れが見られることや、-ï 韻の表記では漢字音表記専用の文字によって契丹語には本来なかったと考えられる ï を表記する例が多く、契丹語の音韻体系に適応し i によって表記される例は比較的少ないことがわかった。したがって、契丹語に取り入れられた漢字音は、借用語として特定の語だけが取り入れられたのであり、契丹語の音韻体系に同化した「字音」の体系が存在していたわけではないと考えられる。

5.5　おわりに

本論文では、契丹小字で表記された漢字音から原字の推定音価の検証および契丹語の音韻体系の解明を試みた。新しく出土した資料のデータを加え、先行研究では用いられてこなかったパスパ文字などの音韻資料を参考にすることで、目的としていた先行研究の推定音価の検証を行い、𗈪 iɑu を ɛu、𗈫 iu を y、𗈬 is を ʃi、𗈭 uŋ を ɯŋ などと修正することで、原字の推定音価を改善することができ、𗈮—𗈯など新しい異字の可能性を指摘することができた。

また、契丹語の音韻体系に関しては、ある程度の契丹語での音声の弁別を明らかにすることができ、契丹語に前舌円唇母音が存在する可能性などを指摘することができた。

しかし、今回は契丹小字で表記された漢字音のみを扱ったために、十分に検討できなかった部分があり、母音調和の分析も初歩的な段階にとどまっている。今後は、今回は扱うことができなかった漢文資料に残された契丹語の語彙や、動詞語尾の研究などを通じて、さらに詳細に研究を進めていきたい。

参考文献

長田夏樹(1991)「契丹漢字音探源―契丹小字によって表記された漢字音の音価とその体系について」日中合同契丹文字国際シンポジウム発表原稿.(長田 2001:724-737 に収録)

長田夏樹(2001)『長田夏樹論述集(下) 漢字文化圏と比較言語学』京都:ナカニシヤ出版.

庄垣内正弘(2003)『ロシア所蔵ウイグル語文献の研究―ウイグル文字表記漢文とウイグル語仏典テキスト―』京都:京都大学大学院文学研究科.

白鳥庫吉(1910-13)「東胡民族考」『史学雑誌』21 編(1910):369-393, 741-762, 1003-1026, 22 編 (1911):63-88, 589-606, 1265-1288, 1381-1407, 23 編 (1912):117-142, 237-262, 1013-1030, 1133-1148, 1243-1269, 24 編(1913):17-45, 854-884.(白鳥 1970:63-320 に収録)

白鳥庫吉(1970)『白鳥庫吉全集　第四巻』東京:岩波書店.

藤堂明保, 相原茂(1985)『新訂　中国語概論』東京:大修館書店.

水谷眞成(1957)「唐代における中国語語頭鼻音の Denasalization 進行過程」『東洋学報』第 39 巻第 4 号:1-31.

吉池孝一(2003)「漢語の精母系子音を表わす契丹小字について」『KOTONOHA』第 13 号:18-21.

吉池孝一(2004a)「止摂開口精母系の漢字音を表わす契丹小字について」『KOTONOHA』第 14 号:11-14.

吉池孝一(2004b)「止摂開口荘章母系の漢字音を表わす契丹小字について」『KOTONOHA』第 15 号:11-15.

愛新覚羅烏拉熙春(2004)『契丹語言文字研究』京都:東亜歴史文化研究会.

陳乃雄(1987)「近十年来我国契丹字研究」『内蒙古大学学報』1987 年第 3 期:105-133.

陳乃雄, 包聯群編(2005)『契丹小字研究論文選編』呼和浩特:内蒙古人民出版社.

吉如何(2007)「契丹小字原字字形規範与原字総表」首届全国契丹文字及相関領域学術研討会発表資料.

即実(1996)『謎林問径―契丹小字解読新程』瀋陽:遼寧民族出版社.

李珍華, 周長楫編撰(1999)『漢字古今音表（修訂本）』北京:中華書局.

劉鳳翥(2005)『遍訪契丹文字話拓碑』北京:華芸出版社.

劉鳳翥, 周洪山, 趙傑, 朱志民(1995)「契丹小字解読五探」『漢学研究』13 巻第 2 期:313-347.

聶鴻音(1988)「論契丹語中漢語借詞的音系基礎」『民族語文』1988 年第 2 期:41-49.
清格爾泰(2002)『契丹小字釈読問題』東京:東京外国語大学.
清格爾泰(2007)「契丹語動詞附加成分的研究」『蒙古学集刊』2007 年第 2 期.(電子刊行物)
清格爾泰, 劉鳳翥, 陳乃雄, 于宝林, 邢複礼(1985)『契丹小字研究』北京:中国社会科学出版社.
孫伯君(2007)「契丹小字幾類声母的読音」『民族語文』2007 年第 3 期:44-51.
孫竹主編(1990)『蒙古語族語言詞典』西寧:青海人民出版社.
王力(1980)『漢語史稿』北京:中華書局.
呉英哲(2005)『契丹語静詞語法範疇研究』内蒙古大学博士論文.
呉英哲(2007a)「契丹小字中的漢語入声韻尾的痕跡」『漢字文化』2007 年第 3 期:26-29.
呉英哲(2007b)「契丹小字中的"元音附加法"」『民族語文』2007 年第 4 期:40-51.
袁海波, 李宇峰(2004)「遼代漢文《永清公主墓誌》考釈」『中国歴史文物』2004 年第 5 期:71-76.
于宝林(1998)『契丹古代史論稿』合肥:黄山書社出版.

Clauson, Gerard (1972) *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*, Oxford: Clarendon Press.
Coblin, W. South (2007) *A Handbook of 'Phags-pa Chinese*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
Pelliot, Paul (1930) "Notes sur le "Turkestan" de M. W. Barthold", *T'oung Pao*, Vol.XXVII:13-56.

付録　契丹小字原字総表　　(吉如何 2007 による)

1 一	45	89	133 支	177	221 伏	265	309	353	397
2 王	46	90	134	178	222	266	310	354	398
3 玉	47	91	135	179	223	267	311	355	399
4 主	48	92	136	180	224	268	312	356	400
5 王	49	93	137	181	225	269	313	357	401
6 天	50	94	138	182	226	270	314	358	402
7 兆	51	95	139	183	227	271	315	359	403
8 干	52	96	140	184	228	272	316	360	404
9 乘	53	97	141	185	229	273	317	361	405
10 奕	54	98	142	186	230	274	318	362	406
11	55	99	143	187	231	275	319	363	407
12 天	56	100	144	188	232	276	320	364	408
13	57	101	145	189	233	277	321	365	409
14	58	102	146	190	234	278	322	366	410
15	59	103	147	191	235	279	323	367	411
16	60	104	148	192	236	280	324	368	412
17	61	105	149	193	237	281	325	369	413
18	62	106	150	194	238	282	326	370	414
19	63	107	151	195	239	283	327	371	415
20	64	108	152	196	240	284	328	372	416
21	65	109	153	197	241	285	329	373	417
22 十	66	110	154	198	242	286	330	374	418
23 土	67 丙	111	155	199	243	287	331	375	419
24	68	112	156	200	244	288	332	376	420
25	69	113	157	201	245	289	333	377	421
26	70 丁	113	158	202	246	290	334	378	422
27	71 可	115	159	203	247	291	335	379	423
28	72	116	160	204	248	292	336	380	424
29	73	117	161	205	249	293	337	381	425
30	74	118	162	206	250	294	338	382	426
31	75	119	163	207	251	295	339	383	427
32	76	120	164	208	252	296	340	384	428
33	77	121	165	209	253	297	341	385	429
34	78	122	166	210	254	298	342	386	430
35	79	123	167	211	255	299	343	387	431
36 廿	80	124	168	212	256	300	344	388	432
37	81	125	169	213	257	301	345	389	433
38	82	126	170	214	258	302	346	390	434
39	83 大	127	171	215	259	303	347	391	435
40	84	128	172	216	260	304	348	392	436
41	85	129	173	217	261	305	349	393	437
42	86	130	174	218 行	262	306	350	394	438
43	87	131	175	219	263	307	351	395	
44 市	88	132	176	220	264	308	352	396	